

エクスポートツール 2

ユーザガイド

Hitachi Virtual Storage Platform One Block 85

4051-1J-U22-00

ストレージシステムを操作する場合は、必ずこのマニュアルを読み、操作手順、および指示事項をよく理解してから操作してください。

著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2026, Hitachi Vantara, Ltd.

免責事項

このマニュアルの内容の一部または全部を無断で複製することはできません。

このマニュアルの内容については、将来予告なしに変更することがあります。

このマニュアルに基づいてソフトウェアを操作した結果、たとえ当該ソフトウェアがインストールされているお客様所有のコンピュータに何らかの障害が発生しても、当社は一切責任を負いかねますので、あらかじめご了承ください。このマニュアルの当該ソフトウェアご購入後のサポートサービスに関する詳細は、弊社営業担当にお問い合わせください。

商標類

Internet Explorer は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft Excel は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Oracle[®]、Java、MySQL 及び NetSuite は、Oracle、その子会社及び関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国ならびに他の国における登録商標です。

その他記載の会社名、製品名などは、それぞれの会社の商標または登録商標です。

輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

発行

2026 年 1 月 (4051-1J-U22-00)

目次

はじめに.....	7
対象ストレージシステム.....	8
マニュアルの参照と適合プログラムバージョン.....	8
対象読者.....	8
マニュアルで使用する記号について.....	8
プログラムプロダクト TrueCopy について.....	8
発行履歴.....	9
1.エクスポートツール 2 の概要.....	11
1.1 エクスポートツール 2 の概要.....	12
2.エクスポートツール 2 で出力する性能情報の注意事項.....	13
2.1 性能情報の蓄積に関する注意事項.....	14
2.2 保守作業時の性能情報の注意事項.....	14
2.2.1 保守作業時.....	14
2.2.2 ユーザ操作時.....	14
3.エクスポートツール 2 を利用するための準備.....	15
3.1 エクスポートツール 2 の要件.....	16
3.2 エクスポートツール 2 を Windows コンピュータにインストールする.....	17
3.3 エクスポートツール 2 を UNIX コンピュータにインストールする.....	18
3.4 エクスポートツール 2 での SSL 通信.....	18
3.5 エクスポートツール 2 に証明書を登録する (Windows)	19
3.6 エクスポートツール 2 の証明書を表示する (Windows)	19
3.7 エクスポートツール 2 から証明書を削除する (Windows)	20
3.8 エクスポートツール 2 のヘルプを表示する (Windows)	21
3.9 エクスポートツール 2 に証明書を登録する (UNIX)	21
3.10 エクスポートツール 2 の証明書を表示する (UNIX)	22
3.11 エクスポートツール 2 から証明書を削除する (UNIX)	22
3.12 エクスポートツール 2 のヘルプを表示する (UNIX)	23
3.13 エクスポートツール 2 をアンインストールする.....	23
3.14 エクスポートツール 2 の初期設定を変更する.....	24

4.エクスポートツール 2 の使用	25
4.1 エクスポートツール 2 の実行	26
4.2 エクスポートツール 2 で保存できるデータとファイル	28
4.2.1 ポート関連のファイル	30
4.2.2 エラーポート関連のファイル	31
4.2.3 パリティグループ関連のファイル	32
4.2.4 外部ボリュームまたは仮想ボリューム関連のファイル	34
4.2.5 LU 関連のファイル	41
4.2.6 リソース利用状況および書き込み待ち率関連のファイル	44
4.2.7 バックエンドポート関連のファイル	45
4.2.8 TrueCopy、TrueCopy for Mainframe および global-active device によるリモートコピー関連のファイル (装置全体)	46
4.2.9 TrueCopy、TrueCopy for Mainframe および global-active device によるリモートコピー関連のファイル (ボリューム単位)	47
4.2.10 TrueCopy および global-active device によるリモートコピー関連のファイル (LU 単位)	48
4.2.11 Universal Replicator および Universal Replicator for Mainframe によるリモートコピー関連のファイル (装置全体)	48
4.2.12 Universal Replicator および Universal Replicator for Mainframe によるリモートコピー関連のファイル (ボリューム単位)	49
4.2.13 Universal Replicator によるリモートコピー関連のファイル (LU 単位)	50
4.2.14 Universal Replicator および Universal Replicator for Mainframe によるリモートコピー関連のファイル (ジャーナル単位)	50
4.2.15 アクセスパス (AccessPath) 関連のファイル	51
4.3 エクスポートツール 2 が返す終了コード一覧	53
4.4 コマンドリファレンス	54
4.4.1 コマンドの構文	54
4.4.2 サンプリング間隔確認機能 (show interval コマンド)	55
4.4.3 サンプリング間隔設定機能 (set interval コマンド)	56
4.4.4 蓄積データ期間確認機能 (show range コマンド)	57
4.4.5 性能採取対象 CU 番号確認機能 (show cu コマンド)	58
4.4.6 性能採取対象 CU 番号追加機能 (add cu コマンド)	59
4.4.7 性能採取対象 CU 番号削除機能 (remove cu コマンド)	61
4.4.8 性能メトリクスエクスポート機能 (export data コマンド)	62
4.4.9 ヘルプ機能 (help コマンド)	65
4.5 無効なモニタリングデータとデータが出力されない原因	66
4.6 サンプリング間隔との組み合わせによる性能採取対象 CU 番号の変更可否	66
5.エクスポートツール 2 のトラブルシューティング	69
5.1 エクスポートツール 2 のコマンド実行時に関するトラブルシューティング	70
5.2 エクスポートツール 2 のエラーメッセージ一覧	70
5.3 エクスポートツール 2 のログ	82
5.4 お問い合わせについて	83
付録 A 構成別のエクスポートツール 2 の要件と所要時間	85
A.1 構成別のエクスポートツール 2 の要件と所要時間	86
付録 B このマニュアルの参考情報	87
B.1 このマニュアルでの表記	88

B.2 このマニュアルで使用している略語.....	88
B.3 KB（キロバイト）などの単位表記について.....	88
用語解説.....	89



はじめに

このマニュアルでは、エクスポートツール 2 の概要と使用方法について説明しています。

- 対象ストレージシステム
- マニュアルの参照と適合プログラムバージョン
- 対象読者
- マニュアルで使用する記号について
- プログラムプロダクト TrueCopy について
- 発行履歴

対象ストレージシステム

このマニュアルでは、次に示す Hitachi Virtual Storage Platform One Block 80 のストレージシステムに対応する製品（プログラムプロダクト）を対象として記述しています。

- Hitachi Virtual Storage Platform One Block 85

このマニュアルでは特に断りのない限り、上記モデルのストレージシステムを単に「ストレージシステム」または「本ストレージシステム」と称することがあります。

マニュアルの参照と適合プログラムバージョン

このマニュアルは、次の DKCMAIN プログラムバージョンに適合しています。

A0-05-21-XX

対象読者

このマニュアルは、次の方を対象読者として記述しています。

- ストレージシステムを運用管理する方
- UNIX[®] コンピュータまたは Windows[®] コンピュータを使い慣れている方
- Web ブラウザを使い慣れている方

マニュアルで使用する記号について

このマニュアルでは、注意書きや補足情報を、次のとおり記載しています。



注意

データの消失・破壊のおそれや、データの整合性がなくなるおそれがある場合などの注意を示します。



メモ

解説、補足説明、付加情報などを示します。



ヒント

より効率的にストレージシステムを利用するのに役立つ情報を示します。

プログラムプロダクト TrueCopy について

DKCMAIN プログラムバージョン A0-05-21-XX/XX 以前では、TrueCopy は未サポートです。

発行履歴

マニュアル資料番号	発行年月	変更内容
4051-1J-U22-00	2026 年 1 月	新規 適合 DKCMAIN プログラムバージョン : A0-05-21-XX

エクスポートツール 2 の概要

エクスポートツール 2 の概要について説明します。

□ 1.1 エクスポートツール 2 の概要

1.1 エクスポートツール 2 の概要

本ストレージシステムは日々の性能情報※をストレージシステムの内部に記録しています。記録された性能情報は毎日新しい性能情報で上書きされますが、エクスポートツール 2 を使うことで外部に出力できます。これによって任意の期間の性能情報をストレージシステムの外部に蓄積できます。

あらかじめ性能情報を蓄積しておくことで、ストレージに問題が発生していないことの定期的な確認と報告、ストレージシステムに性能問題が発生したときの解析や、性能の将来予測などに活用できます。

性能情報は CSV 形式で出力されます。性能情報の確認や解析は、ストレージシステムの管理者が表計算ソフトなどを利用して実施します。

注※

性能情報とは、ストレージシステムのポートやボリュームといったリソースごとの I/O 積算値など、性能計算を行うための元データです。



メモ

デフォルトでは、直近 5 日間（120 時間）の性能情報が CFMM に記録されます。CFMM には 1440 回分のプロット（記憶領域）があり、デフォルトでは 5 分おきに性能情報が記録されます。ストレージシステムは、最後のプロットに性能情報を記録したあとに、先頭のプロットに戻って記録を続けます。

性能情報の記録間隔を 5 分～60 分の範囲（5 分単位）で変更できます。記録間隔を変更することで、記録される期間が変わります（[4.4.3 サンプルング間隔設定機能（set interval コマンド）](#)）。例えば、記録間隔を 60 分に設定すると、記録される期間は、 $60 \times 1440 = 86400$ 分間（60 日間）になります。

ただし、性能採取対象の CU を 64 個以下に設定すると、記録間隔を 1 分～15 分の範囲（1 分単位）で変更でき、1440 回分のプロットに性能情報が記録されます。例えば、性能採取対象の CU 数を 64 個以下かつ記録間隔を 1 分に設定すると、記録される期間は $1 \times 1440 = 1440$ 分間（1 日）になります。

エクスポートツール 2 で出力する性能情報の注意事項

エクスポートツール 2 で出力する性能情報の注意事項を説明します。

- 2.1 性能情報の蓄積に関する注意事項
- 2.2 保守作業時の性能情報の注意事項

2.1 性能情報の蓄積に関する注意事項

- 次の状態にあるときは、性能情報が記録されません。
 - ストレージシステムの電源スイッチ OFF から停止完了まで
 - ストレージシステムの電源スイッチ ON から起動完了まで
 - オンラインでのマイクロプログラム交換操作中
 - 全 CTL（コントローラボード）または全 CFMM（キャッシュフラッシュメモリモジュール）が閉塞している
- CTL または CFMM の交換をした場合、該当する CTL が持つ性能情報が初期化されます。ただし、性能情報はすべての CTL に蓄積されているため、一部の CTL または CFMM を対象とした交換では、交換していない CTL にて性能情報は保持されます。すべての CTL または CFMM の交換が伴う保守を行う場合は、性能情報は残りません。性能情報が必要な場合は、交換前に必ず採取してください。

2.2 保守作業時の性能情報の注意事項

2.2.1 保守作業時

次の保守作業を実施した場合、不正な性能情報を出力する、正常に性能情報を採取できない、または性能情報の収集に時間がかかることがあります。

- キャッシュメモリの交換
- ドライブの増設、交換、または撤去
- システム構成の変更
- マイクロプログラムの交換
- コントローラの交換
- ダンプ情報の採取

2.2.2 ユーザ操作時

次のユーザ操作を実施した場合、不正な性能情報を出力する、正常に性能情報を採取できない、または性能情報の収集に時間がかかることがあります。

- 論理デバイスのフォーマット
- 監査ログのエクスポート
- エクスポートツール 2 の複数起動
- ダンプ情報の採取

エクスポートツール 2 を利用するための準備

エクスポートツール 2 を利用するための準備について説明します。

- 3.1 エクスポートツール 2 の要件
- 3.2 エクスポートツール 2 を Windows コンピュータにインストールする
- 3.3 エクスポートツール 2 を UNIX コンピュータにインストールする
- 3.4 エクスポートツール 2 での SSL 通信
- 3.5 エクスポートツール 2 に証明書を登録する (Windows)
- 3.6 エクスポートツール 2 の証明書を表示する (Windows)
- 3.7 エクスポートツール 2 から証明書を削除する (Windows)
- 3.8 エクスポートツール 2 のヘルプを表示する (Windows)
- 3.9 エクスポートツール 2 に証明書を登録する (UNIX)
- 3.10 エクスポートツール 2 の証明書を表示する (UNIX)
- 3.11 エクスポートツール 2 から証明書を削除する (UNIX)
- 3.12 エクスポートツール 2 のヘルプを表示する (UNIX)
- 3.13 エクスポートツール 2 をアンインストールする
- 3.14 エクスポートツール 2 の初期設定を変更する

3.1 エクスポートツール 2 の要件

エクスポートツール 2 を利用するには、次の 4 つが必要です。

Windows コンピュータまたは UNIX コンピュータ

エクスポートツール 2 は、Windows コンピュータまたは UNIX コンピュータ上で稼働します。ただし、Windows および UNIX の種類には制限があります。

エクスポートツール 2 がサポートする OS を次に示します。ベンダーのサポート期間内の OS を使用してください。サポート期間を過ぎている OS での動作は保証できません。

- Windows 11 (64bit)
- Windows Server 2016 (64bit)
- Windows Server 2019 (64bit)
- Windows Server 2022 (64bit)
- Windows Server 2025 (64bit)
- Red Hat Enterprise Linux Ver9.2 (64bit)

エクスポートツール 2 の実行に必要なシステム環境（Windows および UNIX 共通）を次に示します。

項目	要件	備考
プロセッサ	Intel Core i5 6600 プロセッサ相当	—
メモリ	4GB 以上※1、2	—
ストレージの空き容量	50GB 以上※1	エクスポートデータを圧縮して出力する場合でも左記の空き容量が必要になります。
ネットワークアダプタ	1Gbps または 10Gbps イーサネット	—

注※1

1 台のコンピュータから複数台（n 台）のストレージシステムに対して同時にツールを実行する場合、n 倍したストレージの空き容量と 8GB のメモリが必要になります。

注※2

ストレージシステムのリソース数（LDEV 数や LU 数など）が多い場合、8GB 以上必要になることがあります。

ストレージシステムのリソース数（LDEV 数や LU 数など）によって必要になるメモリとストレージ空き容量、エクスポートに必要な時間が異なります。構成別のエクスポートツール 2 の要件と所要時間の目安については「[A.1 構成別のエクスポートツール 2 の要件と所要時間](#)」を参照してください。



注意

UNIX コンピュータの JVM で乱数生成に使用されるデフォルトライブラリは、/dev/random です。/dev/random がエントロピーを消費する際、乱数生成に時間がかかり、通信処理がブロックされることがあります。ブロックを防止するには、rng-tools または haveged パッケージを使用して、エントロピー生成を高速化してください。詳細は OS ベンダーにお問い合わせください。

Java Runtime Environment (JRE)

エクスポートツール 2 を利用するには、Windows コンピュータまたは UNIX コンピュータに JRE をインストールする必要があります。エクスポートツール 2 を利用するために必要となる JRE のバージョンを次に示します。

- JRE8.0 (8u40 以降) 以上、JRE11.0 以下※
- JRE17.0 (17.0.4.1+1 以降)
- JRE21.0 (21.0.5+11 以降)

注※

JRE8.0 の場合は、以下の注意事項があります。

- 通信プロトコルは TLSv1.2 のみサポートしています。
- Linux 環境で ESM の [TLS セキュリティ選択] 画面のセキュリティモード CNSA1.0 を有効に設定している場合、エクスポートツール 2 を実行できません。

エクスポートツール 2 で使用するユーザ ID に必要なロール

エクスポートツール 2 で使用するユーザ ID には、次に示すロールを割り当ててください。

- サンプリング間隔確認機能、蓄積データ期間確認機能、および性能メトリクスエクスポート機能を利用するために必要なロール
ストレージ管理者 (パフォーマンス管理) または保守 (ベンダ専用)
- サンプリング間隔設定機能を利用するために必要なロール
ストレージ管理者 (パフォーマンス管理)

ユーザ ID およびパスワードとして使用できる文字を次に示します。

- ユーザ ID : 1~63 文字の半角英数字および !#\$%&'*+-. /=?@^_`{|}~
- パスワード : 6~63 文字の半角英数字および ASCII 文字でキーイン可能なスペース以外のすべての記号

ただし、ユーザ ID とパスワードの先頭文字に - は使用できません。

ユーザの作成方法については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

エクスポートツール 2 のプログラム

エクスポートツール 2 は、プログラムプロダクト用のメディアに格納されています。エクスポートツール 2 を Windows および UNIX コンピュータにインストールします。

DKCMAIN ファームウェアバージョンの先頭 2 桁と一致するバージョンのエクスポートツール 2 をインストールしてください。

3.2 エクスポートツール 2 を Windows コンピュータにインストールする

操作手順

1. Windows コンピュータ上で、エクスポートツール 2 のプログラムを格納するためのディレクトリを新たに 1 つ作成します。

2. プログラムプロダクト用のメディアをコンピュータに挿入します。
3. メディアの¥program¥monitor2 ディレクトリを手順 1 で作成したディレクトリにコピーします。
monitor2 ディレクトリを含め、配下の全ディレクトリと全ファイルを手順 1 で作成したディレクトリにコピーしてください。



メモ

コマンドプロンプト (cmd.exe) の設定で、[レイアウト] – [画面バッファのサイズ] – [高さ] の項目を 1500 以上に設定してください。デフォルトのままではストレージシステムに最大プロット数 (1440 プロット) 分のデータが蓄積されている場合に show range コマンドを実行したとき、コマンドプロンプト上で実行結果を確認できません。

3.3 エクスポートツール 2 を UNIX コンピュータにインストールする

操作手順

1. UNIX コンピュータ上で、エクスポートツール 2 のプログラムを格納するためのディレクトリを新たに 1 つ作成します。
2. プログラムプロダクト用のメディアをマウントします。
3. メディアの /program/monitor2 ディレクトリを手順 1 で作成したディレクトリにコピーします。
monitor2 ディレクトリを含め、配下の全ディレクトリと全ファイルを手順 1 で作成したディレクトリにコピーしてください。
4. JRE のバージョンが 17.0、または 21.0 の場合は、chmod a+x runUnix2.sh コマンドを実行して、runUnix2.sh に実行権限を付与します。
JRE のバージョンが 8.0 以上 11.0 以下の場合は、chmod a+x runUnix.sh コマンドを実行して、runUnix.sh に実行権限を付与します。

3.4 エクスポートツール 2 での SSL 通信

エクスポートツール 2 で ESM に保管されているモニタリングデータを PC などに転送する場合、SSL 通信の利用を推奨します。SSL 通信により、通信データが暗号化され、通信のセキュリティを高めることが可能です。

また、ESM の証明書を更新している場合、ESM のルート証明書をエクスポートツール 2 に登録することで、接続先の正当性を検証できます。この検証は、有効と無効を切り替えることが可能です。有効時に検証が失敗すると、エクスポートツール 2 の処理を中断します。無効時の場合、エクスポートツール 2 では検証しません。

証明書の要件については、『システム管理者ガイド』のストレージシステムと管理ツールの操作端末間の SSL/TLS 通信を参照してください。証明書の要件を満たしているか不明な場合は、ストレージシステムにアップロードされている Web サーバ接続用証明書が要件を満たしているか、セキュリティ管理者に確認してください。



注意

- ・ 検証対象の証明書チェーンの階層数の上限は 20 です。証明書チェーンの階層数が 20 以下の証明書を使用してください。
- ・ ESM のルート証明書がインポートされていない場合、エラーとなりエクスポートツール 2 の処理を中断します。
- ・ エクスポートツール 2 の実行時に、コマンドパラメタ"-security"で ignore を指定すると証明書を検証しなくなります。推奨しません。

3.5 エクスポートツール 2 に証明書を登録する (Windows)

ESM の証明書を更新している場合、ESM のルート証明書をエクスポートツール 2 に登録します。

前提条件

- ・ エクスポートツール 2 が動作する PC にログイン済みであること。

操作手順

1. エクスポートツール 2 が動作する PC に、証明書ファイルを格納します。
2. コマンドプロンプトを管理者権限で起動します。
3. カレントディレクトリを、エクスポートツール 2 がインストールされているディレクトリに移動します。
4. 次のコマンドを実行します。

SetupCertWin.bat△import△ [エイリアス名] △ [証明書パス]

[エイリアス名] は任意の名称です。[証明書パス] は証明書ファイルパスのパスです。

例：

```
SetupCertWin.bat△import△test△ca.crt
```

凡例

△：半角スペース

3.6 エクスポートツール 2 の証明書を表示する (Windows)

エクスポートツール 2 に登録されているルート証明書を表示します。

前提条件

- ・ エクスポートツール 2 が動作する PC にログイン済みであること。

操作手順

1. コマンドプロンプトを管理者権限で起動します。
2. カレントディレクトリを、エクスポートツール 2 がインストールされているディレクトリに移動します。
3. 次のコマンドを実行します。

SetupCertWin.bat△list

出力例：

```
別名: test
作成日: 2025/11/11
エントリ・タイプ: trustedCertEntry

所有者: CN=Root CA Level 1, OU=Storage, O=Hitachi, L=Yokohama,
ST=Kanagawa, C=JP
発行者: CN=Root CA Level 1, OU=Storage, O=Hitachi, L=Yokohama,
ST=Kanagawa, C=JP
シリアル番号: 281a83ae0122fe8cd4c23e1dae7a8fc5a2a110c
有効期間の開始日: Tue Nov 11 13:42:26 JST 2025 終了日: Fri Nov 09
13:42:26 JST 2035
証明書のフィンガプリント:
    SHA1: BB:4A:2F:9C:9E:4A:15:2C:EC:39:A5:43:81:01:7D:16:23:A6:07:85
    SHA256:
75:99:B1:F0:F8:86:85:82:48:D8:E0:BC:9C:65:1F:46:39:39:5E:99:65:2D:7D:4
C:33:C7:EF:9B:A6:B1:9A:8A
署名アルゴリズム名: SHA256WITHRSA
サブジェクト公開鍵アルゴリズム: 2048 ビット RSA 鍵
バージョン: 3
```

凡例

△：半角スペース

3.7 エクスポートツール 2 から証明書を削除する (Windows)

エクスポートツール 2 に登録されているルート証明書を削除します。

前提条件

- ・ エクスポートツール 2 が動作する PC にログイン済みであること。

操作手順

1. エクスポートツール 2 に登録されている、ルート証明書によって接続される、エイリアスを確認します（[「3.6 エクスポートツール 2 の証明書を表示する \(Windows\)」](#)を参照）。
2. コマンドプロンプトを管理者権限で起動します。
3. カレントディレクトリを、エクスポートツール 2 がインストールされているディレクトリに移動します。
4. 次のコマンドを実行します。

SetupCertWin.bat△delete△ [エイリアス名]

[エイリアス名] は任意の名称です。

例：

```
SetupCertWin.bat△delete△test
```

凡例

△：半角スペース

3.8 エクスポートツール 2 のヘルプを表示する（Windows）

エクスポートツール 2 のヘルプを表示します。

前提条件

- ・ エクスポートツール 2 が動作する PC にログイン済みであること。

操作手順

1. コマンドプロンプトを管理者権限で起動します。
2. カレントディレクトリを、エクスポートツール 2 がインストールされているディレクトリに移動します。
3. 次のコマンドを実行します。

SetupCertWin.bat△help

出力例：

```
Command Line Syntax
import <alias> <certificate-file-path>
alias:          alias of specified certificate
certificate-file-path: relative or absolute certificate file path
delete <alias>
alias:          alias of specified certificate
list
help
```

凡例

△：半角スペース

3.9 エクスポートツール 2 に証明書を登録する（UNIX）

ESM の証明書を更新している場合、ESM のルート証明書をエクスポートツール 2 に登録します。

前提条件

- ・ エクスポートツール 2 が動作する PC にログイン済みであること。

操作手順

1. エクスポートツール 2 が動作する PC に、証明書ファイルを格納します。
2. カレントディレクトリを、エクスポートツール 2 がインストールされているディレクトリに移動します。
3. スーパーユーザで下記のコマンドを実行します。

SetupCertUnix.sh△import△ [エイリアス名] △ [証明書パス]

[エイリアス名] は任意の名称です。[証明書パス] は証明書ファイルパスのパスです。

例：

```
SetupCertUnix.sh△import△test△ca.crt
```

凡例

△：半角スペース

3.10 エクスポートツール 2 の証明書を表示する（UNIX）

エクスポートツール 2 に登録されているルート証明書を表示します。

前提条件

- エクスポートツール 2 が動作する PC にログイン済みであること。

操作手順

- カレントディレクトリを、エクスポートツール 2 がインストールされているディレクトリに移動します。
- スーパーユーザで次のコマンドを実行します。

SetupCertUnix.sh△list

出力例：

```
別名: test
作成日: 2025/11/12
エントリ・タイプ: trustedCertEntry

所有者: CN=RootCA, L=Where, OU=OU, O=Org, ST=CA, C=JP
発行者: CN=RootCA, L=Where, OU=OU, O=Org, ST=CA, C=JP
シリアル番号: 2bb8f205b83faa74158183900552eedc840440
有効期間の開始日: Mon May 18 13:53:08 JST 2020 終了日: Wed Jun 17
13:53:08 JST 2020
証明書のフィンガプリント:
    MD5: A6:D1:FB:7A:A2:93:D0:1A:75:11:C9:59:97:5C:B0:D0
    SHA1: 90:48:B8:28:5B:B7:30:C3:56:D4:2B:88:45:C0:73:13:74:70:1F:F7
    SHA256:
23:81:99:85:C9:7C:DA:94:64:AE:F4:BF:17:98:99:22:D4:B2:66:97:14:94:03:C
5:43:3C:C7:4A:48:C8:80:03
署名アルゴリズム名: SHA256WITHRSA
サブジェクト公開鍵アルゴリズム: 2048 ビット RSA 鍵
バージョン: 1
```

凡例

△：半角スペース

3.11 エクスポートツール 2 から証明書を削除する（UNIX）

エクスポートツール 2 に登録されているルート証明書を削除します。

前提条件

- エクスポートツール 2 が動作する PC にログイン済みであること。

操作手順

1. エクスポートツール 2 に登録されている、ルート証明書によって接続される、エイリアスを確認します（「[3.10 エクスポートツール 2 の証明書を表示する \(UNIX\)](#)」を参照）。
2. カレントディレクトリを、エクスポートツール 2 がインストールされているディレクトリに移動します。
3. スーパーユーザで次のコマンドを実行します。

SetupCertUnix.sh△delete△ [エイリアス名]

[エイリアス名] は任意の名称です。

例：

```
SetupCertUnix.sh△delete△test
```

凡例

△：半角スペース

3.12 エクスポートツール 2 のヘルプを表示する (UNIX)

エクスポートツール 2 のヘルプを表示します。

前提条件

- ・ エクスポートツール 2 が動作する PC にログイン済みであること。

操作手順

1. カレントディレクトリを、エクスポートツール 2 がインストールされているディレクトリに移動します。
2. 次のコマンドを実行します。

SetupCertUnix.sh△help

出力例：

```
Command Line Syntax
import <alias> <certificate-file-path>
  alias:          alias of specified certificate
  certificate-file-path: relative or absolute certificate file path
delete <alias>
  alias:          alias of specified certificate
list
help
```

凡例

△：半角スペース

3.13 エクスポートツール 2 をアンインストールする

アンインストールするには、エクスポートツール 2 をインストールする際に作成したディレクトリを削除してください。ディレクトリを削除すると、エクスポートしたデータ、ログおよびユーザが編集したファイルも削除されます。エクスポートしたデータ、ログおよびユーザが編集したファイ

ルが必要な場合、エクスポートツール 2 をアンインストールする前に、別のディレクトリに保存しておいてください。

3.14 エクスポートツール 2 の初期設定を変更する

エクスポートツール 2 のデフォルトの動作を変更したい場合、monitor2 ディレクトリ配下に格納されているプロパティファイル (exportTool.properties) をテキストエディタで編集して設定を変更します。プロパティファイルは、Windows と UNIX で同一の内容です。

プロパティファイルに設定できる項目を次に示します。

プロパティファイル設定項目	説明
exportdata.protocol	ストレージシステムに接続するときのプロトコルを指定します。指定できる値は次のとおりです。 - HTTP - HTTPS デフォルトは HTTPS です。
exportdata.portNumber	ストレージシステムに接続するときのポート番号を指定します。1～65535 の範囲で指定します。デフォルトは 443 です。
exportdata.isCsvHeader	エクスポートする CSV ファイルにヘッダ行を出力するかどうかを指定します。指定できる値は次のとおりです。 - TRUE 出力します。 - FALSE 出力しません。 デフォルトは TRUE です。export data コマンドの -option の値に resourceid_on_column を指定する場合は TRUE を指定してください。FALSE を指定すると export data コマンド実行時にエラーが発生します。
log.level	ユーザは設定を変更する必要がないプロパティです。
log.directory	ログの出力先を指定します。デフォルトは ./log です。 最大 150 文字 (半角) までのパスを指定できます。エクスポートツール 2 が格納されているディレクトリからの相対パスで指定する場合、絶対パスに置き換えたパスの長さがこの上限値を超えないようにしてください。 "¥"を指定する場合は"¥¥"と指定してください (例: C:¥¥log)

インストール直後のプロパティファイルの内容を次に示します。プロパティファイルの改行コードは、Windows と UNIX とともに<CR+LF>です。

```
# ***Storage Connect properties***
exportdata.protocol=HTTPS
exportdata.portNumber=443
# ***CSV properties***
exportdata.isCsvHeader=TRUE
# ***Log properties***
log.level=NORMAL
log.directory=./log
```

エクスポートツール 2 の使用

エクスポートツール 2 の実行方法について説明します。

- 4.1 エクスポートツール 2 の実行
- 4.2 エクスポートツール 2 で保存できるデータとファイル
- 4.3 エクスポートツール 2 が返す終了コード一覧
- 4.4 コマンドリファレンス
- 4.5 無効なモニタリングデータとデータが出力されない原因
- 4.6 サンプリング間隔との組み合わせによる性能採取対象 CU 番号の変更可否

4.1 エクスポートツール 2 の実行

エクスポートツール 2 のインストール先ディレクトリには次のファイルやディレクトリが格納されています。

ファイルまたはディレクトリ	説明
runWin.bat	JRE のバージョンが 8.0 以上、11.0 以下の場合に実行する、Windows 用エクスポートツール 2 実行用バッチ runWin.bat は、Windows 版専用のファイルであり、UNIX 環境のユーザは不要であるため、削除することを推奨します。
runUnix.sh	JRE のバージョンが 8.0 以上、11.0 以下の場合に実行する、UNIX 用エクスポートツール 2 実行用シェル runUnix.sh は、UNIX 版専用のファイルであり、Windows 環境のユーザは不要であるため、削除することを推奨します。
runWin2.bat	JRE のバージョンが 17.0、または 21.0 の場合に実行する、Windows 用エクスポートツール 2 実行用バッチ runWin2.bat は、Windows 版専用のファイルであり、UNIX 環境のユーザは不要であるため、削除することを推奨します。
runUnix2.sh	JRE のバージョンが 17.0、または 21.0 の場合に実行する、UNIX 用エクスポートツール 2 実行用シェル runUnix2.sh は、UNIX 版専用のファイルであり、Windows 環境のユーザは不要であるため、削除することを推奨します。
exportTool.properties	エクスポートツール 2 のプロパティファイル
exportTool.jar	エクスポートツール 2 の本体
Readme.txt	Readme ファイル
Version.txt	バージョンファイル (XX-YY-ZZ/RR の形式でバージョン情報がファイル内に記載されています)
external	エクスポートツール 2 の外部ファイルディレクトリ エクスポートツール 2 の実行に必要なファイルが格納されています。
log	エクスポートツール 2 のログ出力ディレクトリ デフォルトではこのディレクトリに出力されます。
out	エクスポートデータの出力ディレクトリ デフォルトではこのディレクトリに出力されます。

エクスポートツール 2 を実行してモニタリングデータをファイルに保存するには、バッチファイルまたはシェルスクリプトを実行します。Windows コンピュータでの実行例と実行結果を次に示します。

実行例

```
c:\%WINDOWS> cd c:\%export
c:\%export> runWin2.bat export data -ip 192.168.0.100 -login User Pass
```

実行結果

```
Start export performance data
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
=====> 65.0%
```

エクスポートツール 2 がモニタリングデータの保存を開始すると、標準出力（コマンドプロンプトなど）には「=>」という記号が出力されます。この記号は、データの保存が進むにつれて増え続けます。もしエラーが発生した場合、標準出力にはエラーメッセージが表示され、コマンドは終了します。

エクスポートツール 2 の処理が正常終了すると、モニタリングデータは ZIP 形式のアーカイブファイルに圧縮保存されます。CSV ファイルを取得するには、ZIP ファイルから CSV ファイルを抽出してください。もしご利用のオペレーティングシステムにファイル抽出プログラムが組み込まれていなければ、ファイル解凍ツールを入手して CSV ファイルを抽出してください。

エクスポートツール 2 の実行が終了すると、エクスポートツール 2 は終了コードを返します。終了コードについては「[4.3 エクスポートツール 2 が返す終了コード一覧](#)」を参照してください。



注意

- エクスポートツール 2 の実行時に、次のようなエラーがコマンドプロンプト上に表示されることがあります。ユーザ ID、パスワードが正しく指定できていない可能性がありますので、以下に記載されているユーザ ID とパスワードの制約を確認して、正しく指定できているか見直してください。
 - エラーの例 1 :
「<」の使い方が誤っています。
 - エラーの例 2 :
「'''」は、内部コマンドまたは外部コマンド、操作可能なプログラムまたはバッチ ファイルとして認識されていません。
 - エラーの例 3 :
ファイル名、ディレクトリ名、またはボリュームラベルの構文が間違っています。
- 対話形式ではなくユーザ ID とパスワードを指定する場合は以下の注意事項があります。
 - ユーザ ID に「&^=|」の文字が含まれる場合は、半角のダブルクォーテーション「"」で囲ってください。
 - パスワードに「&^,;<=>|"」の文字が含まれる場合は、半角のダブルクォーテーション「"」で囲ってください。
 - パスワードに半角のダブルクォーテーション「"」が含まれている場合は、半角のダブルクォーテーション「"」を追加します。パスワードが、「au"to&pass"wo&rd」の場合の例を示します。

```
runWin2.bat export data -ip 192.168.0.100 -login autouser
"au""to&pass""wo&rd"
```

上記の例では、改めて半角のダブルクォーテーション「"」に半角のダブルクォーテーション「"」を追加しています。

- エクスポートツール 2 の実行時に、次のメッセージが表示されることがあります。これは、Apache Log4j の脆弱性(CVE-2021-44228)の対策が適用されたコンピュータで、エクスポートツール 2 を実行した際に表示されるもので、動作に支障はありません。

メッセージ :

```
main WARN JNDI lookup class is not available because this JRE does not support JNDI. JNDI string
lookups will not be available, continuing configuration. Ignoring java.lang.ClassNotFoundException:
org.apache.logging.log4j.core.lookup.JndiLookup
```



メモ

- 1 台のマシンからエクスポートツール 2 を同時に複数起動する場合、上限は 3 つまでにしてください。

- ・ エクスポートツール 2 をスケジューラなどに登録して複数同時起動する場合、起動時間を数秒～1 分空けることを推奨します。同じ時間に複数同時起動すると、同一のログファイルに 2 つ以上の実行ログが混在する可能性があります。
- ・ 夜間などにバックグラウンドで実行する場合、リダイレクトによって実行結果をファイルに出力する運用を推奨します。

4.2 エクスポートツール 2 で保存できるデータとファイル

エクスポートツール 2 で保存できるデータとファイルを説明します。データは、通常は ZIP 形式のファイルに圧縮されます。または、ZIP ファイルに圧縮しないで、データを直接 CSV ファイルに保存することもできます。



注意

- ・ LDEV フォーマット時には不正なモニタデータが表示されることがあります。
- ・ 電源を入れ直した直後のモニタリングデータは、極端に値が大きくなる場合があります。

エクスポートツール 2 は次のファイルを出力します。

- ・ メタ情報の CSV ファイル
- ・ 性能情報の CSV ファイル

メタ情報の CSV ファイル

メタ情報の CSV ファイルのフォーマットを次に示します。

項目	説明
ファイル名	export_metadata.csv
ファイル出力先	export data コマンドの-outpath パラメタで指定したディレクトリの直下
ファイル形式	CSV 形式
ファイルフォーマット (CSV ヘッダ)	"Serial Number", "Product Name", "From", "To", "Sampling" ※CSV ヘッダは常に出力されます。 ・ Serial Number : ストレージシステムの装置製番 (10 進数 6 桁) ・ Product Name : ストレージシステムの製品名称 ・ From : export data コマンドの-range パラメタで指定した蓄積データの開始日時 (YYYY/MM/DD△HH:MM) ・ To : export data コマンドの-range パラメタで指定した蓄積データの終了日時 (YYYY/MM/DD△HH:MM) ・ Sampling : サンプリング間隔 (1～60 分) 蓄積データの最終プロットとその 1 個前の蓄積データの時間差が出力されます。

メタ情報の CSV ファイルの出力例を次に示します。

```
"Serial Number", "Product Name", "From", "To", "Sampling"
"900001", "VSP One B85", "2017/04/13 15:00", "2017/04/14 15:00", "5"
```

性能情報の CSV ファイル

性能情報の CSV ファイルのフォーマットは、export data コマンドの -option パラメタの指定値 (resourceid_on_row または resourceid_on_column) によって異なります。

resourceid_on_row および resourceid_on_column のどちらも指定しない場合は、resourceid_on_row を指定した場合のフォーマットで出力されます。

- resourceid_on_row を指定した場合
採取時刻、リソース (例えば、ポート) ごとの性能情報を 1 レコードとして出力するフォーマットです。

項目	説明
CSV ヘッダ	"Date", "Time", "ID", "メトリクス名称" CSV ヘッダの出力有無は、プロパティファイル (exportTool.properties) の CSV 出力情報 (exportdata.isCsvHeader) にて設定できます。設定値のデフォルトは、「出力する」です。
レコード形式	"YYYY/MM/DD", "HH:MM", "リソース ID", "性能値"
レコード配置	1 レコード当たり 1 行が出力されます。1 行に複数レコードが存在することはありません。

CSV ファイルの出力例を次に示します。

```
"Date", "Time", "ID", "Total_IOPS"
"2017/07/10", "18:00", "CL1-A/1122334455667788<HOST_A>", "10"
"2017/07/10", "18:00", "CL1-A/1122334455667788<HOST_A>", "10"
"2017/07/10", "18:00", "CL1-A/1122334455667788<HOST_A>", "10"
```

- resourceid_on_column を指定した場合
同時刻に採取した複数のリソース (例えば、各ポート) の性能情報を 1 レコードとして出力するフォーマットです。

項目	説明
CSV ヘッダ	- CSV ファイル名 - Serial Number : <シリアル番号> (<ストレージモデル名>) - From : 出力した蓄積データ範囲の開始日時 (YYYY/MM/DD△HH:MM) - To : 出力した蓄積データ範囲の終了日時 (YYYY/MM/DD△HH:MM) - Sampling : サンプリング間隔 "Date", "Time", "リソース ID", "リソース ID", ..., "リソース ID" この出力フォーマットを指定する場合は、プロパティファイル (exportTool.properties) の CSV 出力情報 (exportdata.isCsvHeader) に TRUE (CSV ヘッダを出力する) を指定してください。FALSE (CSV ヘッダを出力しない) を指定すると、export data コマンド実行時にエラーが発生します。
レコード形式	"YYYY/MM/DD", "HH:MM", "性能値", "性能値", ..., "性能値"
レコード配置	同時刻の複数リソースの性能情報が 1 行で出力されます。

CSV ファイルの出力例を次に示します。

```
Total_IOPS.csv
Serial Number : 900001(VSP One B85)
From : 2021/09/20 23:40
To : 2021/09/20 23:45
Sampling : 5
```

```
"Date","Time","CL1-A/1122334455667788<HOST_A>","CL1-A/
1122334455667788<HOST_B>"
"2021/09/20","23:40","10","10"
"2021/09/20","23:45","10","10"
```



メモ

CSV ファイルには、製品の型名を識別する ID が以下のように出力されます。

- VSP One B85

4.2.1 ポート関連のファイル

Port グループの性能情報のファイルです。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
Port/Target	Total_IOPS.csv	ポートごとに測定した 1 秒当たりの読み書き回数。
Port/Target	Total_Transfer_Rate.csv	ポートごとに測定した 1 秒当たりの転送データ量（単位は KB/秒）
Port/Target	Total_Response_Time.csv	ポートごとに測定した平均レスポンスタイム（単位はマイクロ秒※）
Port/Target	Read_IOPS.csv	ポートごとに測定した 1 秒当たりの読み込み回数。
Port/Target	Read_Transfer_Rate.csv	ポートごとに測定した 1 秒当たりの読み込みデータ転送量（単位は KB/秒）
Port/Target	Read_Response_Time.csv	ポートごとに測定した読み込み平均レスポンスタイム（単位はマイクロ秒※）
Port/Target	Write_IOPS.csv	ポートごとに測定した 1 秒当たりの書き込み回数。
Port/Target	Write_Transfer_Rate.csv	ポートごとに測定した 1 秒当たりの書き込みデータ転送量（単位は KB/秒）
Port/Target	Write_Response_Time.csv	ポートごとに測定した書き込み平均レスポンスタイム（単位はマイクロ秒※）
Port/Initiator	Total_IOPS.csv	イニシエータポートごとに測定した 1 秒当たりの読み書き回数。
Port/Initiator	Total_Transfer_Rate.csv	イニシエータポートごとに測定した 1 秒当たりの転送データ量（単位は KB/秒）
Port/Initiator	Total_Response_Time.csv	イニシエータポートごとに測定した平均レスポンスタイム（単位はマイクロ秒※）
Port/Initiator	Read_IOPS.csv	イニシエータポートごとに測定した 1 秒当たりの読み込み回数。
Port/Initiator	Read_Transfer_Rate.csv	イニシエータポートごとに測定した 1 秒当たりの読み込みデータ転送量（単位は KB/秒）
Port/Initiator	Read_Response_Time.csv	イニシエータポートごとに測定した読み込み平均レスポンスタイム（単位はマイクロ秒※）
Port/Initiator	Write_IOPS.csv	イニシエータポートごとに測定した 1 秒当たりの書き込み回数。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
Port/Initiator	Write_Transfer_Rate.csv	イニシエータポートごとに測定した 1 秒当たりの書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
Port/Initiator	Write_Response_Time.csv	イニシエータポートごとに測定した書き込み平均レスポンスタイム (単位はマイクロ秒※)
Port/MFTarget	Total_IOPS.csv	メインフレームファイバポートごとに測定した 1 秒当たりの読み書き回数。
Port/MFTarget	Total_Transfer_Rate.csv	メインフレームファイバポートごとに測定した 1 秒当たりの転送データ量 (単位は KB/秒)
Port/MFTarget	Total_Response_Time.csv	メインフレームファイバポートごとに測定した平均レスポンスタイム (単位はマイクロ秒※)
Port/MFTarget	Read_Transfer_Rate.csv	メインフレームファイバポートごとに測定した 1 秒当たりの読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
Port/MFTarget	Write_Transfer_Rate.csv	メインフレームファイバポートごとに測定した 1 秒当たりの書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
Port/MFTarget	Average_CMR_Delay.csv	メインフレームファイバポートごとに測定した平均 CMR 処理時間 (単位はマイクロ秒※)
Port/MFTarget	Total_Average_Disconnected_Time.csv	メインフレームファイバポートごとに測定した平均切断時間 (単位はマイクロ秒※)
Port/MFTarget	Total_Average_Connected_Time.csv	メインフレームファイバポートごとに測定した平均接続時間 (単位はマイクロ秒※)
Port/MFTarget	MF_Port_Open_Exchanges.csv	メインフレームファイバポートごとに測定した 1 秒当たりのオープンエクスチェンジ数

注※

1 マイクロ秒は、1/1000000 秒です。

4.2.2 エラーポート関連のファイル

PortError グループの性能情報のファイルです。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
PortError/FC	Loss_of_Signal_Count.csv	ファイバチャネルポートごとの Loss of Signal Count
PortError/FC	Bad_Received_Character_Count.csv	ファイバチャネルポートごとの Bad Received Character Count
PortError/FC	Loss_of_Synchronization_Count.csv	ファイバチャネルポートごとの Loss of Synchronization Count
PortError/FC	Link_Failure_Count.csv	ファイバチャネルポートごとの Link Failure Count

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
PortError/FC	Received_EOFa_Count.csv	ファイバチャネルポートごとの Received EOFa Count
PortError/FC	Discarded_Frame_Count.csv	ファイバチャネルポートごとの Discarded Frame Count
PortError/FC	Bad_CRC_Count.csv	ファイバチャネルポートごとの Bad CRC Count
PortError/FC	Protocol_Error_Count.csv	ファイバチャネルポートごとの Protocol Error Count
PortError/FC	FEC_Un_correctable_Count.csv	ファイバチャネルポートごとの FEC Un-correctable Count
PortError/iSCSI	MAC_CRC_Error_Count.csv	Ethernet ポートごとの MAC CRC Error Count
PortError/iSCSI	IP_Error_Packet_Count.csv	Ethernet ポートごとの IP Error Packet Count※ ¹
PortError/iSCSI	IPv6_Error_Packet_Count.csv	Ethernet ポートごとの IPv6 Error Packet Count※ ¹
PortError/iSCSI	TCP_Retransmit_Timer_Expired_Count.csv	Ethernet ポートごとの TCP Retransmit Timer Expired Count※ ²
PortError/iSCSI	Header_Digest_Error_Count.csv	Ethernet ポートごとの iSCSI Header Digest Error Count
PortError/iSCSI	Data_Digest_Error_Count.csv	Ethernet ポートごとの iSCSI Data Digest Error Count

注※1

Ethernet 25Gbps チャネルボードのポートの場合は、チャネルボード内の全ポートの合計値が、個々のポートの値として出力されます。

注※2

Ethernet 25Gbps チャネルボードのポートの場合は、常に 0 が出力されます。

4.2.3 パリティグループ関連のファイル

ParityGroup グループの性能情報のファイルです。

これらのファイルには、プールボリュームなどのホストから I/O を受け付けないボリュームのモニタリングデータは含まれません。そのため、性能情報が出力されず、ファイルのみが出力されます。ただし、稼働率を示す Utilization_Rate.csv には、ホストから I/O を受け付けないボリュームのモニタリングデータも含まれ、性能情報が出力されます。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
ParityGroup/Internal	Total_IOPS.csv	パリティグループごとのホストからの 1 秒当たりの I/O 処理の実行数（1 秒当たりの読み書き回数）
ParityGroup/Internal	Total_Transfer_Rate.csv	パリティグループごとのホストとの 1 秒当たりの I/O データ転送量（単位は KB/秒）

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
ParityGroup/Internal	Total_Response_Time.csv	パリティグループごとの I/O レスポンス タイム（単位はマイクロ秒※）
ParityGroup/Internal	Read_IOPS.csv	パリティグループごとのホストからの 1 秒当たりの読み込み処理の実行数
ParityGroup/Internal	Read_Hit_Rate.csv	パリティグループごとのホストからの読 み込みリクエストに対するキャッシュヒ ットの比率
ParityGroup/Internal	Read_Transfer_Rate.csv	パリティグループごとのホストとの 1 秒 当たりの読み込みデータ転送量（単位は KB/秒）
ParityGroup/Internal	Read_Response_Time.csv	パリティグループごとの読み込みレスポ ンスタイム（単位はマイクロ秒※）
ParityGroup/Internal	Write_IOPS.csv	パリティグループごとのホストからの 1 秒当たりの書き込み処理の実行数
ParityGroup/Internal	Write_Hit_Rate.csv	パリティグループごとのホストからの書 き込みリクエストに対するキャッシュヒ ットの比率
ParityGroup/Internal	Write_Transfer_Rate.csv	パリティグループごとのホストとの 1 秒 当たりの書き込みデータ転送量（単位は KB/秒）
ParityGroup/Internal	Write_Response_Time.csv	パリティグループごとの書き込みレスポ ンスタイム（単位はマイクロ秒※）
ParityGroup/Internal	Random_Read_IOPS.csv	パリティグループごとのホストからの 1 秒当たりのランダム読み込み処理の実行 数
ParityGroup/Internal	Random_Read_Hit_Rate.csv	パリティグループごとのホストからのラン ダム読み込みリクエストに対するキャ ッシュヒットの比率
ParityGroup/Internal	Random_Read_Transfer_Rate.csv	パリティグループごとのホストとの 1 秒 当たりのランダム読み込みデータ転送量 （単位は KB/秒）
ParityGroup/Internal	Random_Write_IOPS.csv	パリティグループごとのホストからの 1 秒当たりのランダム書き込み処理の実行 数
ParityGroup/Internal	Random_Write_Hit_Rate.csv	パリティグループごとのホストからのラン ダム書き込みリクエストに対するキャ ッシュヒットの比率
ParityGroup/Internal	Random_Write_Transfer_Rate.csv	パリティグループごとのホストとの 1 秒 当たりのランダム書き込みデータ転送量 （単位は KB/秒）
ParityGroup/Internal	Sequential_Read_IOPS.csv	パリティグループごとのホストからの 1 秒当たりのシーケンシャル読み込み処理 の実行数
ParityGroup/Internal	Sequential_Read_Hit_Rate.csv	パリティグループごとのホストからのシー ケンシャル読み込みリクエストに対す るキャッシュヒットの比率

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
ParityGroup/Internal	Sequential_Read_Transfer_Rate.csv	パリティグループごとのホストとの 1 秒当たりのシーケンシャル読み込みデータ転送量（単位は KB/秒）
ParityGroup/Internal	Sequential_Write_IOPS.csv	パリティグループごとのホストからの 1 秒当たりのシーケンシャル書き込み処理の実行数
ParityGroup/Internal	Sequential_Write_Hit_Rate.csv	パリティグループごとのホストからのシーケンシャル書き込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
ParityGroup/Internal	Sequential_Write_Transfer_Rate.csv	パリティグループごとのホストとの 1 秒当たりのシーケンシャル書き込みデータ転送量（単位は KB/秒）
ParityGroup/Internal	Backend_Transfer_Count_Total.csv	パリティグループごとの 1 秒当たりのキャッシュとドライブ間のデータ転送回数の平均
ParityGroup/Internal	Cache_to_Drive.csv	パリティグループごとの 1 秒当たりのキャッシュからドライブへのデータ転送回数平均
ParityGroup/Internal	Drive_to_Cache_Random.csv	パリティグループごとの 1 秒当たりのドライブからキャッシュへのランダムデータ転送回数平均
ParityGroup/Internal	Drive_to_Cache_Sequential.csv	パリティグループごとの 1 秒当たりのドライブからキャッシュへのシーケンシャルデータ転送回数平均
ParityGroup/Internal	Utilization_Rate.csv	パリティグループごとの稼働率 内部ボリュームのみのモニタリングデータです。外部ボリュームのモニタリングデータは含まれません。
ParityGroup/Internal	CFW_Read_IOPS.csv	パリティグループごとに測定した 1 秒当たりの読み取り回数 (Cache Fast Write モードの場合)
ParityGroup/Internal	CFW_Read_Hit_Rate.csv	パリティグループごとの Read Hit 率 (Cache Fast Write モードの場合)
ParityGroup/Internal	CFW_Write_IOPS.csv	パリティグループごとに測定した 1 秒当たりの書き込み回数 (Cache Fast Write モードの場合)
ParityGroup/Internal	CFW_Write_Hit_Rate.csv	パリティグループごとの Write Hit 率 (Cache Fast Write モードの場合)

注※

1 マイクロ秒は、1/1000000 秒です。

4.2.4 外部ボリュームまたは仮想ボリューム関連のファイル

LDEV グループの性能情報のファイルです。

これらのファイルには、プールボリュームなどのホストから I/O を受け付けられないボリュームのモニタリングデータは含まれません。そのため、性能情報が出力されず、ファイルのみが出力されます。

ただし、稼働率を示す Utilization_Rate.csv と Utilization_Rate_SI.csv には、ホストから I/O を受け付けないボリュームのモニタリングデータも含まれ、性能情報が出力されます。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
LDEV/Basic	Total_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの I/O 処理の実行数 (1 秒当たりの読み書き回数)
LDEV/Basic	Total_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの I/O データ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	Total_Response_Time.csv	外部ボリュームごとの I/O レスポンスタイム (単位はマイクロ秒※)
LDEV/Basic	Read_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの読み込み処理の実行数
LDEV/Basic	Read_Hit_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストからの読み込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/Basic	Read_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	Read_Response_Time.csv	外部ボリュームごとの読み込みレスポンスタイム (単位はマイクロ秒※)
LDEV/Basic	Write_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの書き込み処理の実行数
LDEV/Basic	Write_Hit_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストからの書き込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/Basic	Write_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	Write_Response_Time.csv	外部ボリュームごとの書き込みレスポンスタイム (単位はマイクロ秒※)
LDEV/Basic	Random_Read_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりのランダム読み込み処理の実行数
LDEV/Basic	Random_Read_Hit_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストからのランダム読み込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/Basic	Random_Read_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりのランダム読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	Random_Write_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりのランダム書き込み処理の実行数
LDEV/Basic	Random_Write_Hit_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストからのランダム書き込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/Basic	Random_Write_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりのランダム書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
LDEV/Basic	Sequential_Read_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりのシーケンシャル読み込み処理の実行数
LDEV/Basic	Sequential_Read_Hit_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストからのシーケンシャル読み込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/Basic	Sequential_Read_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりのシーケンシャル読み込みデータ転送量（単位は KB/秒）
LDEV/Basic	Sequential_Write_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりのシーケンシャル書き込み処理の実行数
LDEV/Basic	Sequential_Write_Hit_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストからのシーケンシャル書き込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/Basic	Sequential_Write_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりのシーケンシャル書き込みデータ転送量（単位は KB/秒）
LDEV/Basic	Backend_Transfer_Count_Total.csv	外部ボリュームごとの 1 秒当たりのキャッシュとドライブ間のデータ転送回数の平均
LDEV/Basic	Cache_to_Drive.csv	外部ボリュームごとの 1 秒当たりのキャッシュからドライブへのデータ転送回数平均
LDEV/Basic	Drive_to_Cache_Random.csv	外部ボリュームごとの 1 秒当たりのドライブからキャッシュへのランダムデータ転送回数平均
LDEV/Basic	Drive_to_Cache_Sequential.csv	外部ボリュームごとの 1 秒当たりのドライブからキャッシュへのシーケンシャルデータ転送回数平均
LDEV/Basic	Utilization_Rate.csv	内部ボリュームごとの稼働率 内部ボリュームのみのモニタリングデータです。外部ボリュームのモニタリングデータは含まれません。
LDEV/Basic	Utilization_Rate_SI.csv	通常の ShadowImage ボリュームごとの稼働率 内部ボリュームのみのモニタリングデータです。外部ボリュームのモニタリングデータは含まれません。
LDEV/Basic	UNMAP_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの UNMAP 処理の実行数
LDEV/Basic	UNMAP_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの UNMAP データ転送量（単位は KB/秒）
LDEV/Basic	UNMAP_Response_Time.csv	外部ボリュームごとの UNMAP レスポンスタイム
LDEV/Basic	XCOPY_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの XCOPY 処理の実行数

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
LDEV/Basic	XCOPY_Read_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの XCOPY 読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	XCOPY_Write_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの XCOPY 書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	XCOPY_Response_Time.csv	外部ボリュームごとの XCOPY レスポンスタイム
LDEV/Basic	WriteSame_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの Write Same 処理の実行数
LDEV/Basic	WriteSame_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの Write Same データ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	WriteSame_Response_Time.csv	外部ボリュームごとの Write Same レスポンスタイム
LDEV/Basic	ATS_Compare_and_Write_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの ATS 処理の実行数
LDEV/Basic	ATS_Compare_and_Write_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの ATS データ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	ATS_Compare_and_Write_Response_Time.csv	外部ボリュームごとの ATS レスポンスタイム
LDEV/Basic	WUT_Write_Using-Token_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの WUT 処理の実行数
LDEV/Basic	WUT_Write_Using-Token_Read_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの WUT 読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	WUT_Write_Using-Token_Write_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの WUT 書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	WUT_Write_Using-Token_Response_Time.csv	外部ボリュームごとの WUT レスポンスタイム
LDEV/Basic	Other_Read_Commands_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの他の読み込み処理の実行数
LDEV/Basic	Other_Read_Commands_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの他の読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	Other_Read_Commands_Response_Time.csv	外部ボリュームごとの他の読み込みレスポンスタイム
LDEV/Basic	Other_Write_Commands_IOPS.csv	外部ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの他の書き込み処理の実行数
LDEV/Basic	Other_Write_Commands_Transfer_Rate.csv	外部ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの他の書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/Basic	Other_Write_Commands_Response_Time.csv	外部ボリュームごとの他の書き込みレスポンスタイム

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
LDEV/Basic	CFW_Read_IOPS.csv	ボリュームごとに測定した 1 秒当たりの読み取り回数 (Cache Fast Write モードの場合)
LDEV/Basic	CFW_Read_Hit_Rate.csv	ボリュームごとの Read Hit 率 (Cache Fast Write モードの場合)
LDEV/Basic	CFW_Write_IOPS.csv	ボリュームごとに測定した 1 秒当たりの書き込み回数 (Cache Fast Write モードの場合)
LDEV/Basic	CFW_Write_Hit_Rate.csv	ボリュームごとの Write Hit 率 (Cache Fast Write モードの場合)
LDEV/DP	Total_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの I/O 処理の実行数 (1 秒当たりの読み書き回数)
LDEV/DP	Total_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの I/O データ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	Total_Response_Time.csv	仮想ボリュームごとの I/O レスポンスタイム (単位はマイクロ秒※)
LDEV/DP	Read_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの読み込み処理の実行数
LDEV/DP	Read_Hit_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストからの読み込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/DP	Read_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	Read_Response_Time.csv	仮想ボリュームごとの読み込みレスポンスタイム (単位はマイクロ秒※)
LDEV/DP	Write_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの書き込み処理の実行数
LDEV/DP	Write_Hit_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストからの書き込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/DP	Write_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	Write_Response_Time.csv	仮想ボリュームごとの書き込みレスポンスタイム (単位はマイクロ秒※)
LDEV/DP	Random_Read_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりのランダム読み込み処理の実行数
LDEV/DP	Random_Read_Hit_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストからのランダム読み込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/DP	Random_Read_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりのランダム読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	Random_Write_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりのランダム書き込み処理の実行数

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
LDEV/DP	Random_Write_Hit_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストからのランダム書き込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/DP	Random_Write_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりのランダム書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	Sequential_Read_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりのシーケンシャル読み込み処理の実行数
LDEV/DP	Sequential_Read_Hit_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストからのシーケンシャル読み込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/DP	Sequential_Read_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりのシーケンシャル読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	Sequential_Write_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりのシーケンシャル書き込み処理の実行数
LDEV/DP	Sequential_Write_Hit_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストからのシーケンシャル書き込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LDEV/DP	Sequential_Write_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりのシーケンシャル書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	Backend_Transfer_Count_Total.csv	仮想ボリュームごとの 1 秒当たりのキャッシュとドライブ間のデータ転送回数の平均
LDEV/DP	Cache_to_Drive.csv	仮想ボリュームごとの 1 秒当たりのキャッシュからドライブへのデータ転送回数平均
LDEV/DP	Drive_to_Cache_Random.csv	仮想ボリュームごとの 1 秒当たりのドライブからキャッシュへのランダムデータ転送回数平均
LDEV/DP	Drive_to_Cache_Sequential.csv	仮想ボリュームごとの 1 秒当たりのドライブからキャッシュへのシーケンシャルデータ転送回数平均
LDEV/DP	UNMAP_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの UNMAP 処理の実行数
LDEV/DP	UNMAP_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの UNMAP データ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	UNMAP_Response_Time.csv	仮想ボリュームごとの UNMAP レスポンスタイム
LDEV/DP	XCOPY_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの XCOPY 処理の実行数
LDEV/DP	XCOPY_Read_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの XCOPY 読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
LDEV/DP	XCOPY_Write_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの XCOPY 書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	XCOPY_Response_Time.csv	仮想ボリュームごとの XCOPY レスポンスタイム
LDEV/DP	WriteSame_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの Write Same 処理の実行数
LDEV/DP	WriteSame_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの Write Same データ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	WriteSame_Response_Time.csv	仮想ボリュームごとの Write Same レスポンスタイム
LDEV/DP	ATS_Compare_and_Write_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの ATS 処理の実行数
LDEV/DP	ATS_Compare_and_Write_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの ATS データ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	ATS_Compare_and_Write_Response_Time.csv	仮想ボリュームごとの ATS レスポンスタイム
LDEV/DP	WUT_Write_Using-Token_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの WUT 処理の実行数
LDEV/DP	WUT_Write_Using-Token_Read_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの WUT 読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	WUT_Write_Using-Token_Write_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの WUT 書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	WUT_Write_Using-Token_Response_Time.csv	仮想ボリュームごとの WUT レスポンスタイム
LDEV/DP	Other_Read_Commands_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの他の読み込み処理の実行数
LDEV/DP	Other_Read_Commands_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの他の読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	Other_Read_Commands_Response_Time.csv	仮想ボリュームごとの他の読み込みレスポンスタイム
LDEV/DP	Other_Write_Commands_IOPS.csv	仮想ボリュームごとのホストからの 1 秒当たりの他の書き込み処理の実行数
LDEV/DP	Other_Write_Commands_Transfer_Rate.csv	仮想ボリュームごとのホストとの 1 秒当たりの他の書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LDEV/DP	Other_Write_Commands_Response_Time.csv	仮想ボリュームごとの他の書き込みレスポンスタイム
LDEV/DP	CFW_Read_IOPS.csv	ボリュームごとに測定した 1 秒当たりの読み取り回数 (Cache Fast Write モードの場合)

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
LDEV/DP	CFW_Read_Hit_Rate.csv	ボリュームごとの Read Hit 率 (Cache Fast Write モードの場合)
LDEV/DP	CFW_Write_IOPS.csv	ボリュームごとに測定した 1 秒当たりの書き込み回数 (Cache Fast Write モードの場合)
LDEV/DP	CFW_Write_Hit_Rate.csv	ボリュームごとの Write Hit 率 (Cache Fast Write モードの場合)

注※

1 マイクロ秒は、1/1000000 秒です。

レスポンスタイムは、ストレージシステムが I/O リクエストの処理を開始してから完了通知を返すまでにかかった時間を示しています。一方、ホスト側で確認できるレスポンスタイムは、ホストが I/O リクエストを発行してから完了通知を受け取るまでのターンアラウンドタイムであることが一般的です。そのため、本性能情報で確認できるレスポンスタイムとホスト側で確認できるレスポンスタイムを比較した場合、多少の誤差が生じます。

4.2.5 LU 関連のファイル

LU グループの性能情報のファイルです。

該当する LDEV にマッピングされている、すべての LU に対して同じ値が出力されます。これらのファイルには、プールボリュームなどのホストから I/O を受け付けないボリュームのモニタリングデータは含まれません。また、FC-NVMe または NVMe/TCP 接続の場合は、本項目に相当するモニタデータは採取されません。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
LU	Total_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりの I/O 処理の実行数 (1 秒当たりの読み書き回数)
LU	Total_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりの I/O データ転送量 (単位は KB/秒)
LU	Total_Response_Time.csv	LU ごとの I/O レスポンスタイム (単位はマイクロ秒※)
LU	Read_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりの読み込み処理の実行数
LU	Read_Hit_Rate.csv	LU ごとのホストからの読み込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LU	Read_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりの読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LU	Read_Response_Time.csv	LU ごとの読み込みレスポンスタイム (単位はマイクロ秒※)
LU	Write_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりの書き込み処理の実行数
LU	Write_Hit_Rate.csv	LU ごとのホストからの書き込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LU	Write_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりの書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
LU	Write_Response_Time.csv	LU ごとの書き込みレスポンスタイム (単位はマイクロ秒※)
LU	Random_Read_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりのランダム読み込み処理の実行数
LU	Random_Read_Hit_Rate.csv	LU ごとのホストからのランダム読み込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LU	Random_Read_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりのランダム読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LU	Random_Write_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりのランダム書き込み処理の実行数
LU	Random_Write_Hit_Rate.csv	LU ごとのホストからのランダム書き込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LU	Random_Write_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりのランダム書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LU	Sequential_Read_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりのシーケンシャル読み込み処理の実行数
LU	Sequential_Read_Hit_Rate.csv	LU ごとのホストからのシーケンシャル読み込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LU	Sequential_Read_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりのシーケンシャル読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LU	Sequential_Write_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりのシーケンシャル書き込み処理の実行数
LU	Sequential_Write_Hit_Rate.csv	LU ごとのホストからのシーケンシャル書き込みリクエストに対するキャッシュヒットの比率
LU	Sequential_Write_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりのシーケンシャル書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LU	UNMAP_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりの UNMAP 処理の実行数
LU	UNMAP_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりの UNMAP データ転送量 (単位は KB/秒)
LU	UNMAP_Response_Time.csv	LU ごとの UNMAP レスポンスタイム
LU	XCOPY_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりの XCOPY 処理の実行数
LU	XCOPY_Read_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりの XCOPY 読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
LU	XCOPY_Write_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりの XCOPY 書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LU	XCOPY_Response_Time.csv	LU ごとの XCOPY レスポンスタイム
LU	WriteSame_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりの Write Same 処理の実行数
LU	WriteSame_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりの Write Same データ転送量 (単位は KB/秒)
LU	WriteSame_Response_Time.csv	LU ごとの Write Same レスポンスタイム
LU	ATS_Compare_and_Write_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりの ATS 処理の実行数
LU	ATS_Compare_and_Write_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりの ATS データ転送量 (単位は KB/秒)
LU	ATS_Compare_and_Write_Response_Time.csv	LU ごとの ATS レスポンスタイム
LU	WUT_Write_Using-Token_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりの WUT 処理の実行数
LU	WUT_Write_Using-Token_Read_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりの WUT 読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LU	WUT_Write_Using-Token_Write_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりの WUT 書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LU	WUT_Write_Using-Token_Response_Time.csv	LU ごとの WUT レスポンスタイム
LU	Other_Read_Commands_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりの他の読み込み処理の実行数
LU	Other_Read_Commands_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりの他の読み込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LU	Other_Read_Commands_Response_Time.csv	LU ごとの他の読み込みレスポンスタイム
LU	Other_Write_Commands_IOPS.csv	LU ごとのホストからの 1 秒当たりの他の書き込み処理の実行数
LU	Other_Write_Commands_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストとの 1 秒当たりの他の書き込みデータ転送量 (単位は KB/秒)
LU	Other_Write_Commands_Response_Time.csv	LU ごとの他の書き込みレスポンスタイム

注※

1 マイクロ秒は、1/1000000 秒です。

レスポンスタイムは、ストレージシステムが I/O リクエストの処理を開始してから完了通知を返すまでにかかった時間を示しています。一方、ホスト側で確認できるレスポンスタイムは、ホストが I/O リクエストを発行してから完了通知を受け取るまでのターンアラウンドタイムであることが一般的です。そのため、本性能情報で確認できるレスポンスタイムとホスト側で確認できるレスポンスタイムを比較した場合、多少の誤差が生じます。

4.2.6 リソース利用状況および書き込み待ち率関連のファイル

MPU グループと Cache グループの性能情報のファイルです。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
MPU	Utilization_Rate.csv	MP ユニットごとの稼働率（トータル）
MPU	Open_Target.csv	MP ユニットごとのオープンターゲット平均利用率
MPU	Open_Initiator.csv	MP ユニットごとのオープンイニシエータ平均利用率
MPU	Open_External.csv	MP ユニットごとのオープンエクスターナル平均利用率
MPU	MF_Target.csv	MP ユニットごとのメインフレームターゲット平均利用率
MPU	MF_External.csv	MP ユニットごとのメインフレームエクスターナル平均利用率
MPU	Backend.csv	MP ユニットごとのバックエンド平均利用率
MPU	Others.csv	MP ユニットごとのその他平均利用率
MPU	Asynchronous_Processing_TrueCopy.csv	MP ユニットごとの非同期処理の TrueCopy 平均利用率
MPU	Asynchronous_Processing_UR.csv	MP ユニットごとの非同期処理の Universal Replicator 平均利用率
MPU	Asynchronous_Processing_GAD.csv	MP ユニットごとの非同期処理の global-active device 平均利用率
MPU	Asynchronous_Processing_SI_VM.csv	MP ユニットごとの非同期処理の ShadowImage と Volume Migration の平均利用率
MPU	Asynchronous_Processing_TI.csv	MP ユニットごとの非同期処理の Thin Image Advanced 平均利用率
MPU	Asynchronous_Processing_GC.csv	MP ユニットごとの非同期処理の GC 平均利用率
MPU	Asynchronous_Processing_PostProcess.csv	MP ユニットごとの非同期処理の PostProcess 平均利用率
MPU	Asynchronous_Processing_FC.csv	MP ユニットごとの非同期処理の FlashCopy 平均利用率
MPU	Utilization_Rate_LDEV_TOP20.csv	MP ユニットごとの稼働率上位 20 位のボリュームの稼働率
MPU	Utilization_Rate_JNLG_TOP20.csv	MP ユニットごとの稼働率上位 20 位のジャーナルグループの稼働率
MPU	Utilization_Rate_ExG_TOP20.csv	MP ユニットごとの稼働率上位 20 位の外部ボリュームグループの稼働率
Cache/ StorageSystem	Used_Size.csv	装置全体のキャッシュメモリ使用量(単位は MB)
Cache/ StorageSystem	Usage_Rate.csv	装置全体のキャッシュメモリ使用率

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
Cache/ StorageSystem	Write_Pending_Rate.csv	装置全体のキャッシュメモリ書き込み待ち率
Cache/ StorageSystem	Side_File_Rate.csv	装置全体のサイドファイル使用率
Cache/MPUnit	Used_Size.csv	MP ユニットごとのキャッシュメモリ使用量（単位は MB）
Cache/MPUnit	Usage_Rate.csv	MP ユニットごとのキャッシュメモリ利用率
Cache/MPUnit	Write_Pending_Rate.csv	MP ユニットごとのキャッシュメモリ書き込み待ち率
Cache/MPUnit	Side_File_Rate.csv	MP ユニットごとのサイドファイル使用率
Cache/CLPR	Used_Size.csv	MP ユニット内の CLPR ごとのキャッシュメモリ使用量（単位は MB）
Cache/CLPR	Usage_Rate.csv	MP ユニット内の CLPR ごとのキャッシュメモリ利用率
Cache/CLPR	Write_Pending_Rate.csv	MP ユニット内の CLPR ごとのキャッシュメモリ書き込み待ち率
Cache/CLPR	Side_File_Rate.csv	MP ユニット内の CLPR ごとのサイドファイル使用率

4.2.7 バックエンドポート関連のファイル

BackendPort グループの性能情報のファイルです。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
BackendPort	Total_IOPS.csv	バックエンドの NVMe ポートごとに測定した 1 秒当たりの読み書き回数
BackendPort	Total_Transfer_Rate.csv	バックエンドの NVMe ポートごとに測定した 1 秒当たりのデータ転送量（単位は KB/秒）
BackendPort	Read_IOPS.csv	バックエンドの NVMe ポートごとに測定した 1 秒当たりの読み取り回数
BackendPort	Read_Transfer_Rate.csv	バックエンドの NVMe ポートごとに測定した 1 秒当たりの読み込みデータ転送量（単位は KB/秒）
BackendPort	Write_IOPS.csv	バックエンドの NVMe ポートごとに測定した 1 秒当たりの書き込み回数
BackendPort	Write_Transfer_Rate.csv	バックエンドの NVMe ポートごとに測定した 1 秒当たりの書き込みデータ転送量（単位は KB/秒）

性能情報の CSV ファイルは、「NVMe Port#」から「PK LOC」へ変換しないで出力されます。読み替えが必要な場合は、次の対応表を参考にしてください。

PK LOC	NVMePort#
01G	0x00/0x01/0x10/0x11
01H	0x02/0x03/0x12/0x13
02G	0x04/0x05/0x14/0x15
02H	0x06/0x07/0x16/0x17
11G	0x08/0x09/0x18/0x19
11H	0x0a/0x0b/0x1a/0x1b
12G	0x0c/0x0d/0x1c/0x1d
12H	0x0e/0x0f/0x1e/0x1f
21G	0x20/0x21/0x30/0x31
21H	0x22/0x23/0x32/0x33
22G	0x24/0x25/0x34/0x35
22H	0x26/0x27/0x36/0x37
31G	0x28/0x29/0x38/0x39
31H	0x2a/0x2b/0x3a/0x3b
32G	0x2c/0x2d/0x3c/0x3d
32H	0x2e/0x2f/0x3e/0x3f
41G	0x40/0x41/0x50/0x51
41H	0x42/0x43/0x52/0x53
42G	0x44/0x45/0x54/0x55
42H	0x46/0x47/0x56/0x57
51G	0x48/0x49/0x58/0x59
51H	0x4a/0x4b/0x5a/0x5b
52G	0x4c/0x4d/0x5c/0x5d
52H	0x4e/0x4f/0x5e/0x5f

4.2.8 TrueCopy、TrueCopy for Mainframe および global-active device によるリモートコピー関連のファイル（装置全体）

TrueCopy グループのうち、装置全体の性能情報のファイルです。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
TrueCopy/StorageSystem	Total_RIOPS.csv	装置全体でのリモート I/O の総数（読み取りと書き込み）（総アクセス回数）
TrueCopy/StorageSystem	Write_RIOPS.csv	装置全体でのリモート I/O の総数（書き込み）（総アクセス回数）
TrueCopy/StorageSystem	RIO_Error_Count.csv	装置全体での RIO UCK 発生回数
TrueCopy/StorageSystem	Pair_Synchronous_Rate.csv	装置全体での同期率
TrueCopy/StorageSystem	Differential_Track.csv	装置全体での差分トラック数
TrueCopy/StorageSystem	Initial_Copy_RIOPS.csv	装置全体での形成コピーのリモート I/O 数（総アクセス回数）

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
TrueCopy/StorageSystem	Initial_Copy_Data_Transfer_Rate.csv	装置全体での形成コピーのデータ転送率 (単位は KB/秒)
TrueCopy/StorageSystem	Initial_Copy_Response_Time.csv	装置全体での形成コピーの応答時間 (単位はマイクロ秒※)
TrueCopy/StorageSystem	Update_Copy_RIOPS.csv	装置全体での更新コピーのリモート I/O 数 (総アクセス回数)
TrueCopy/StorageSystem	Update_Copy_Data_Transfer_Rate.csv	装置全体での更新コピーのデータ転送率 (単位は KB/秒)
TrueCopy/StorageSystem	Update_Copy_Response_Time.csv	装置全体での更新コピーの応答時間 (単位はマイクロ秒※)

注※

1 マイクロ秒は、1/1000000 秒です。

TrueCopy グループは、TrueCopy ペア情報と GAD 情報を含みます。

4.2.9 TrueCopy、TrueCopy for Mainframe および global-active device によるリモートコピー関連のファイル（ボリューム単位）

TrueCopy グループのうち、ボリュームごとの性能情報のファイルです。

これらのファイルには、プールボリュームなどのホストから I/O を受け付けられないボリュームのモニタリングデータは含まれません。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
TrueCopy/LDEV	Total_RIOPS.csv	ボリュームごとのリモート I/O の総数 (読み取りと書き込み) (総アクセス回数)
TrueCopy/LDEV	Write_RIOPS.csv	ボリュームごとのリモート I/O の総数 (書き込み) (総アクセス回数)
TrueCopy/LDEV	RIO_Error_Count.csv	ボリュームごとの RIO UCK 発生回数
TrueCopy/LDEV	Pair_Synchronous_Rate.csv	ボリュームごとの同期率
TrueCopy/LDEV	Differential_Track.csv	ボリュームごとの差分トラック数
TrueCopy/LDEV	Initial_Copy_RIOPS.csv	ボリュームごとの形成コピーのリモート I/O 数 (総アクセス回数)
TrueCopy/LDEV	Initial_Copy_Data_Transfer_Rate.csv	ボリュームごとの形成コピーのデータ転送率 (単位は KB/秒)
TrueCopy/LDEV	Initial_Copy_Response_Time.csv	ボリュームごとの形成コピーの応答時間 (単位はマイクロ秒※)
TrueCopy/LDEV	Update_Copy_RIOPS.csv	ボリュームごとの更新コピーのリモート I/O 数 (総アクセス回数)
TrueCopy/LDEV	Update_Copy_Data_Transfer_Rate.csv	ボリュームごとの更新コピーのデータ転送率 (単位は KB/秒)
TrueCopy/LDEV	Update_Copy_Response_Time.csv	ボリュームごとの更新コピーの応答時間 (単位はマイクロ秒※)

注※

1 マイクロ秒は、1/1000000 秒です。

TrueCopy グループは、TrueCopy ペア情報と GAD 情報を含みます。

4.2.10 TrueCopy および global-active device によるリモートコピー関連のファイル（LU 単位）

TrueCopy グループのうち、LU ごとの性能情報のファイルです。

該当する LDEV にマッピングされている、すべての LU に対して同じ値が出力されます。これらのファイルには、プールボリュームなどのホストから I/O を受け付けないボリュームのモニタリングデータは含まれません。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
TrueCopy/LU	Total_RIOPS.csv	LU ごとのリモート I/O の総数（読み取りと書き込み）（総アクセス回数）
TrueCopy/LU	Write_RIOPS.csv	LU ごとのリモート I/O の総数（書き込み）（総アクセス回数）
TrueCopy/LU	RIO_Error_Count.csv	LU ごとの RIO UCK 発生回数
TrueCopy/LU	Pair_Synchronous_Rate.csv	LU ごとの同期率
TrueCopy/LU	Differential_Track.csv	LU ごとの差分トラック数
TrueCopy/LU	Initial_Copy_RIOPS.csv	LU ごとの形成コピーのリモート I/O 数（総アクセス回数）
TrueCopy/LU	Initial_Copy_Data_Transfer_Rate.csv	LU ごとの形成コピーのデータ転送率（単位は KB/秒）
TrueCopy/LU	Initial_Copy_Response_Time.csv	LU ごとの形成コピーの応答時間（単位はマイクロ秒※）
TrueCopy/LU	Update_Copy_RIOPS.csv	LU ごとの更新コピーのリモート I/O 数（総アクセス回数）
TrueCopy/LU	Update_Copy_Data_Transfer_Rate.csv	LU ごとの更新コピーのデータ転送率（単位は KB/秒）
TrueCopy/LU	Update_Copy_Response_Time.csv	LU ごとの更新コピーの応答時間（単位はマイクロ秒※）

注※

1 マイクロ秒は、1/1000000 秒です。

TrueCopy グループは、TrueCopy ペア情報と GAD 情報を含みます。

4.2.11 Universal Replicator および Universal Replicator for Mainframe によるリモートコピー関連のファイル（装置全体）

UR グループのうち、装置全体の性能情報のファイルです。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
UR/StorageSystem	Write_IOPS.csv	装置全体でのホストからプライマリボリュームへの 1 秒当たりの書き込み I/O 数

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
UR/StorageSystem	Write_Transfer_Rate.csv	装置全体でのホストがプライマリボリュームに書き込みしたときに転送されたデータの平均転送速度（単位は KB/秒）
UR/StorageSystem	Initial_Copy_Hit_Rate.csv	装置全体での形成コピー実行時のプライマリボリュームのキャッシュヒット率
UR/StorageSystem	Initial_Copy_Transfer_Rate.csv	装置全体での形成コピーの実行時に正サイトのストレージシステムから転送されたデータの平均転送速度（単位は KB/秒）
UR/StorageSystem	Master_JNL_RIOPS.csv	装置全体での正サイトのストレージシステムでの 1 秒当たりの副サイトのストレージシステムからの非同期 RIO 数※2
UR/StorageSystem	Master_JNL_Journal_Count.csv	装置全体での正サイトの非同期コピー JNL 総数※2
UR/StorageSystem	Master_JNL_Transfer_Rate.csv	装置全体での正サイトのジャーナル非同期コピー平均転送量※2（単位は KB/秒）
UR/StorageSystem	Master_JNL_RIO_Response_Time.csv	装置全体での正サイトの非同期コピー平均応答時間※2（単位はマイクロ秒※1）
UR/StorageSystem	Remote_JNL_RIOPS.csv	装置全体での副サイトのストレージシステムでの 1 秒当たりの正サイトのストレージシステムからの非同期 RIO 数※2
UR/StorageSystem	Remote_JNL_Journal_Count.csv	装置全体での副サイトの非同期コピー JNL 総数※2
UR/StorageSystem	Remote_JNL_Transfer_Rate.csv	装置全体での副サイトのジャーナル非同期コピー平均転送量※2（単位は KB/秒）
UR/StorageSystem	Remote_JNL_RIO_Response_Time.csv	装置全体での副サイトの非同期コピー平均応答時間※2（単位はマイクロ秒※1）

注※1

1 マイクロ秒は、1/1000000 秒です。

注※2

形成コピー実行時のモニタリングデータも含まれます。

4.2.12 Universal Replicator および Universal Replicator for Mainframe によるリモートコピー関連のファイル（ボリューム単位）

UR グループのうち、ボリュームごとの性能情報のファイルです。

これらのファイルには、プールボリュームなどのホストから I/O を受け付けないボリュームのモニタリングデータは含まれません。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
UR/LDEV	Write_IOPS.csv	ボリュームごとのホストからプライマリボリュームへの 1 秒当たりの書き込み I/O 数
UR/LDEV	Write_Transfer_Rate.csv	ボリュームごとのホストがプライマリボリュームに書き込みしたときに転送されたデータの平均転送速度（単位は KB/秒）

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
UR/LDEV	Initial_Copy_Hit_Rate.csv	ボリュームごとの形成コピー実行時のプライマリボリュームのキャッシュヒット率
UR/LDEV	Initial_Copy_Transfer_Rate.csv	ボリュームごとの形成コピーの実行時に正サイトのストレージシステムから転送されたデータの平均転送速度（単位は KB/秒）

4.2.13 Universal Replicator によるリモートコピー関連のファイル（LU 単位）

UR グループのうち、LU ごとの性能情報のファイルです。

該当する LDEV にマッピングされている、すべての LU に対して同じ値が出力されます。これらのファイルには、プールボリュームなどのホストから I/O を受け付けられないボリュームのモニタリングデータは含まれません。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
UR/LU	Write_IOPS.csv	LU ごとのホストからプライマリボリュームへの 1 秒当たりの書き込み I/O 数
UR/LU	Write_Transfer_Rate.csv	LU ごとのホストがプライマリボリュームに書き込みしたときに転送されたデータの平均転送速度（単位は KB/秒）
UR/LU	Initial_Copy_Hit_Rate.csv	LU ごとの形成コピー実行時のプライマリボリュームのキャッシュヒット率
UR/LU	Initial_Copy_Transfer_Rate.csv	LU ごとの形成コピーの実行時に正サイトのストレージシステムから転送されたデータの平均転送速度（単位は KB/秒）

4.2.14 Universal Replicator および Universal Replicator for Mainframe によるリモートコピー関連のファイル（ジャーナル単位）

UR グループのうち、ジャーナルごとの性能情報のファイルです。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
UR/Journal	Write_IOPS.csv	ジャーナルごとのホストからプライマリボリュームへの 1 秒当たりの書き込み I/O 数
UR/Journal	Write_Transfer_Rate.csv	ジャーナルごとのホストがプライマリボリュームに書き込みしたときに転送されたデータの平均転送速度（単位は KB/秒）
UR/Journal	Initial_Copy_Hit_Rate.csv	ジャーナルごとの形成コピー実行時のプライマリボリュームのキャッシュヒット率
UR/Journal	Initial_Copy_Transfer_Rate.csv	ジャーナルごとの形成コピーの実行時に正サイトのストレージシステムから転送されたデータの平均転送速度（単位は KB/秒）

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
UR/Journal	Master_JNL_RIOPS.csv	ジャーナルごとの正サイトのストレージシステムでの 1 秒当たりの副サイトのストレージシステムからの非同期 RIO 数※2
UR/Journal	Master_JNL_Journal_Count.csv	ジャーナルごとの正サイトの非同期コピー JNL 総数※2
UR/Journal	Master_JNL_Transfer_Rate.csv	ジャーナルごとの正サイトのジャーナル非同期コピー平均転送量※2 (単位は KB/秒)
UR/Journal	Master_JNL_RIO_Response_Time.csv	ジャーナルごとの正サイトの非同期コピー平均応答時間※2 (単位はマイクロ秒※1)
UR/Journal	Master_JNL_Data_Usage_Rate.csv	ジャーナルごとの正サイトの JNL 充填率
UR/Journal	Master_JNL_Meta_Data_Usage_Rate.csv	ジャーナルごとの正サイトの JNCB 充填率
UR/Journal	Remote_JNL_RIOPS.csv	ジャーナルごとの副サイトのストレージシステムでの 1 秒当たりの副サイトのストレージシステムからの非同期 RIO 数※2
UR/Journal	Remote_JNL_Journal_Count.csv	ジャーナルごとの副サイトの非同期コピー JNL 総数※2
UR/Journal	Remote_JNL_Transfer_Rate.csv	ジャーナルごとの副サイトのジャーナル非同期コピー平均転送量※2 (単位は KB/秒)
UR/Journal	Remote_JNL_RIO_Response_Time.csv	ジャーナルごとの副サイトの非同期コピー平均応答時間※2 (単位はマイクロ秒※1)
UR/Journal	Remote_JNL_Data_Usage_Rate.csv	ジャーナルごとの副サイトの JNL 充填率
UR/Journal	Remote_JNL_Meta_Data_Usage_Rate.csv	ジャーナルごとの副サイトの JNCB 充填率

注※1

1 マイクロ秒は、1/1000000 秒です。

注※2

形成コピーの実行時のモニタリングデータも含まれます。

4.2.15 アクセスパス (AccessPath) 関連のファイル

圧縮アクセラレータ、暗号化アクセラレータ、メインフレーム用 DMA、HIE と ISW 間のアクセスパス、MPU と HIE 間のアクセスパスの性能情報ファイルです。

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
AccessPath	Compress_Accelerator_Comp_Rate.csv	圧縮アクセラレータモジュールごとの圧縮稼働率
AccessPath	Compress_Accelerator_DeComp_Rate.csv	圧縮アクセラレータモジュールごとの伸長稼働率
AccessPath	Compress_Accelerator_Copy_Rate.csv	圧縮アクセラレータモジュールごとのコピー稼働率

出力先ディレクトリ	CSV ファイル	ファイルに格納されるデータ
AccessPath	Compress_Accelerator_LZHC_Rate.csv	圧縮アクセラレータモジュールごとの LZHC 稼働率
AccessPath	Encryption_Module_Engine0_Rate.csv	暗号化アクセラレータモジュールごとの 暗号エンジン 0 稼働率
AccessPath	Encryption_Module_Engine1_Rate.csv	暗号化アクセラレータモジュールごとの 暗号エンジン 1 稼働率
AccessPath	Encryption_Module_CMD_XFR_Rate.csv	暗号化アクセラレータモジュールごとの コマンド稼働率
AccessPath	Encryption_Module_DATA_XFR_Rate.csv	暗号化アクセラレータモジュールごとの データ転送稼働率
AccessPath	MF_DMA_Usage_Rate.csv	メインフレーム用データ転送回路ごとの 稼働率
AccessPath	HIE-ISW_Usage_Rate.csv	HIE と ISW 間のアクセスパスの稼働率
AccessPath	MPU-HIE_Usage_Rate.csv	MPU と HIE 間のアクセスパスの稼働率

圧縮アクセラレータは未搭載であっても出力されます。

CTL のロケーションと FAN モジュール (FANM) の搭載位置が、各圧縮アクセラレータモジュール (CAM) や暗号化アクセラレータモジュール (ENCM) の搭載位置になります。

CAM と ENCM 搭載個所についての対応表を次に示します。

CTL のロケーション	FANM の搭載位置	CAM の出力 ID	ENCM の出力 ID
CTL01	FANM-011		CTL01/ENCM01
	FANM-012	CTL01/CAM00	
	FANM-013	CTL01/CAM02	
	FANM-014		CTL01/ENCM00
CTL02	FANM-021		CTL02/ENCM03
	FANM-022	CTL02/CAM04	
	FANM-023	CTL02/CAM06	
	FANM-024		CTL02/ENCM02
CTL11	FANM-111		CTL11/ENCM05
	FANM-112	CTL11/CAM08	
	FANM-113	CTL11/CAM0A	
	FANM-114		CTL11/ENCM04
CTL12	FANM-121		CTL12/ENCM07
	FANM-122	CTL12/CAM0C	
	FANM-123	CTL12/CAM0E	
	FANM-124		CTL12/ENCM06
CTL21	FANM-211		CTL21/ENCM09
	FANM-212	CTL21/CAM10	
	FANM-213	CTL21/CAM12	
	FANM-214		CTL21/ENCM08

CTL のロケーション	FANM の搭載位置	CAM の出力 ID	ENCM の出力 ID
CTL22	FANM-221		CTL22/ENCM0B
	FANM-222	CTL22/CAM14	
	FANM-223	CTL22/CAM16	
	FANM-224		CTL22/ENCM0A
CTL31	FANM-311		CTL31/ENCM0D
	FANM-312	CTL31/CAM18	
	FANM-313	CTL31/CAM1A	
	FANM-314		CTL31/ENCM0C
CTL32	FANM-321		CTL32/ENCM0F
	FANM-322	CTL32/CAM1C	
	FANM-323	CTL32/CAM1E	
	FANM-324		CTL32/ENCM0E
CTL41	FANM-411		CTL41/ENCM11
	FANM-412	CTL41/CAM20	
	FANM-413	CTL41/CAM22	
	FANM-414		CTL41/ENCM10
CTL42	FANM-421		CTL42/ENCM13
	FANM-422	CTL42/CAM24	
	FANM-423	CTL42/CAM26	
	FANM-424		CTL42/ENCM12
CTL51	FANM-511		CTL51/ENCM15
	FANM-512	CTL51/CAM28	
	FANM-513	CTL51/CAM2A	
	FANM-514		CTL51/ENCM14
CTL52	FANM-521		CTL52/ENCM17
	FANM-522	CTL52/CAM2C	
	FANM-523	CTL52/CAM2E	
	FANM-524		CTL52/ENCM16

4.3 エクスポートツール 2 が返す終了コード一覧

エクスポートツール 2 の実行が終了すると、エクスポートツール 2 は終了コードを返します。

バッチファイルの中で終了コードを参照するには、次のようにします。

- Windows では、`%errorlevel%` で終了コードを参照できます。
- UNIX では `$?` で終了コードを参照できます（`csh` など一部のシェルでは `$status` で終了コードを参照できます）。

終了コード	意味
0	エクスポートツール 2 が正常終了しました。

終了コード	意味
1	エクスポートツール 2 の実行が中断しました。再度実行してください。
2	エクスポートツール 2 の実行が中断しました。 中断した要因は、例えば次の内容が考えられます。 ・ ストレージシステムのアカウントのパスワードが誤っています。 ・ コマンドの解析に失敗しました。 ・ プロパティファイルが壊れている、または読み取りに失敗しました。
3	ストレージ管理者（パフォーマンス管理）または保守（ベンダ専用）のロールが割り当てられていません。

4.4 コマンドリファレンス

エクスポートツール 2 の実行時に指定するコマンドについて説明します。次に示すコマンドを実行してください。

JRE のバージョン	Windows 用バッチ	UNIX 用シェル
JRE17.0、または JRE21.0	runWin2.bat	runUnix2.sh
JRE8.0 以上、JRE11.0 以下	runWin.bat	runUnix.sh

4.4.1 コマンドの構文

エクスポートツール 2 の実行時に指定するコマンドの構文について説明します。

構文説明で使われている記号・字体の意味

この節では、次のような記号と字体を使用して構文規則を説明します。

△

空白を示します。

太字

そのままファイルに記述する文字を示します。

斜体

オペランドの種類を示します。

斜体の文字をそのままファイルに記述する必要はありません。

[]

省略できるオペランドを示します。

括弧内の複数にオペランドがあり、縦線で区切られている場合は、複数のオペランドの中から 1 つを指定できます。詳しくは下の表の構文説明の例を参照してください。

{ }

複数のオペランドのうち、どれか 1 つを指定しなくてはならないことを示します。

括弧内には複数のオペランドがあり、それぞれのオペランドは縦線で区切られています。詳しくは下の表を参照してください。

4.4.2 サンプリング間隔確認機能（show interval コマンド）

show interval コマンドは、蓄積データの現在のサンプリング間隔を表示する機能です。

構文

Windows の場合

```
runWin2.bat△show△interval△-ip△{IP アドレス|ホスト名}△[-login△ユーザ名  
△パスワード]△[-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード]  
△[-security△{verify|ignore}]
```

UNIX の場合

```
runUnix2.sh△show△interval△-ip△{IP アドレス|ホスト名}△[-login△ユーザ名  
△パスワード]△[-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード]  
△[-security△{verify|ignore}]
```

パラメタ

- **-ip△{IP アドレス|ホスト名}**
サービス IP アドレスまたはホスト名を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。
このパラメタは必須です。
- **-login△ユーザ名△パスワード**
エクスポートツール 2 で使用するユーザ ID とパスワードを指定します。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、対話形式でユーザ名とパスワードの入力を求められます。
- **-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード**
Proxy ホスト経由でストレージシステムと通信する環境の場合、Proxy ホストの情報を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、**-login** パラメタでユーザ名とパスワードを指定してあるときは認証なしプロキシ、**-login** パラメタを省略したとき、および**-proxy** パラメタでユーザ名とパスワードを指定しなかったとき（Proxy ホストの IP アドレスとポート番号だけ指定したとき）は対話形式でプロキシのユーザ名とパスワードの入力を求められます。
- **-security△{verify|ignore}**
証明書検証を実施するかどうかを指定するパラメタです。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、または **verify** を指定した場合は、証明書検証が実施されます。**ignore** を指定すると証明書を検証しなくなりますが、推奨しません。

実行例

この例では、サービス IP アドレスに IPv4 で「192.168.0.100」、ユーザ ID に「User」、パスワードに「Pass」を指定しています。

```
c:\¥export> runWin2.bat△show△interval△-ip△192.168.0.100△-  
login△User△Pass
```

実行結果

```
Interval△:△50△min  
show△interval△command△success
```

4.4.3 サンプリング間隔設定機能（set interval コマンド）

set interval コマンドは、蓄積データのサンプリング間隔を設定する機能です。設定したあとの次の蓄積タイミングから反映されます。

サンプリング間隔を変更すると、蓄積済みの性能情報が破棄されてから、変更後のサンプリング間隔で、性能情報の蓄積が始まります。蓄積済みの性能情報が事前に必要な場合、性能メトリクスエクスポート機能を使用してエクスポートしてください。

性能採取対象 CU 数とサンプリング間隔設定値の組み合わせによって、プロット（性能情報の蓄積領域）の数が変わります。

なお、性能採取対象の CU は、show cu コマンドで確認できます。性能採取対象の CU を指定するには、add cu コマンド、remove cu コマンドを使用します。

採取対象 CU 数	サンプリング間隔	プロット数
64 個以下	1～15 分（1 分間隔）	1440 個
65 個以上	5～60 分（5 分間隔）	1440 個

構文

Windows の場合

```
runWin2.bat△set△interval△-ip△IP アドレス△[-login△ユーザ名 △パスワード]  
△[-proxy△{IP アドレス | ホスト名} △ポート番号 △ユーザ名 △パスワード] △-  
interval△サンプリング間隔△-q△[-security△{verify | ignore}]
```

UNIX の場合

```
runUnix2.sh△set△interval△-ip△IP アドレス△[-login△ユーザ名 △パスワード]  
△[-proxy△{IP アドレス | ホスト名} △ポート番号 △ユーザ名 △パスワード] △-  
interval△サンプリング間隔△-q△[-security△{verify | ignore}]
```

パラメタ

- **-ip△{IP アドレス | ホスト名}**
サービス IP アドレスまたはホスト名を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。
このパラメタは必須です。
- **-login△ユーザ名 △パスワード**
エクスポートツール 2 で使用するユーザ ID とパスワードを指定します。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、対話形式でユーザ名とパスワードの入力を求められます。
- **-proxy△{IP アドレス | ホスト名} △ポート番号 △ユーザ名 △パスワード**
Proxy ホスト経由でストレージシステムと通信する環境の場合、Proxy ホストの情報を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、**-login** パラメタでユーザ名とパスワードを指定してあるときは認証なしプロキシ、**-login** パラメタを省略したとき、および**-proxy** パラメタ

でユーザ名とパスワードを指定しなかったとき（Proxy ホストの IP アドレスとポート番号だけ指定したとき）は対話形式でプロキシのユーザ名とパスワードの入力を求められます。

- **-interval**△サンプリング間隔

このパラメータは必須です。

性能採取対象 CU 数が、64 個以下の場合は、1～15 の範囲の整数を指定します。単位は分です。
性能採取対象 CU 数が、65 個以上の場合は、5～60 の範囲で 5 の倍数で指定します。単位は分です。

- **-q**

省略可能なパラメータです。

このパラメータを指定しない場合は、蓄積データの破棄と処理続行を問い合わせるメッセージが表示され、メッセージに対する応答が必要です。このパラメータを指定すると、メッセージおよび応答要求なしにコマンドが実行されます。

- **-security**△{**verify**|**ignore**}

証明書検証を実施するかどうかを指定するパラメータです。

このパラメータは省略可能です。省略した場合、または **verify** を指定した場合は、証明書検証が実施されます。**ignore** を指定すると証明書を検証しなくなりますが、推奨しません。

実行例

この例では、サービス IP アドレスに IPv4 で「192.168.0.100」、ユーザ ID に「User」、パスワードに「Pass」、サンプリング間隔に「50」を指定しています。

```
c:\¥export> runWin2.bat△set△interval△-ip△192.168.0.100△-login△User△Pass△-interval△50
```

実行結果

```
Interval△:△50△min  
set△interval△command△success
```

4.4.4 蓄積データ期間確認機能（show range コマンド）

show range コマンドは、蓄積データのその時点での保持期間情報を表示する機能です。表示された期間内で、性能メトリクスエクスポート機能によって性能情報を出力できます。

構文

Windows の場合

```
runWin2.bat△show△range△-ip△{IP アドレス|ホスト名}△[-login△ユーザ名△パスワード]△[-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード]△[-security△{verify|ignore}]
```

UNIX の場合

```
runUnix2.sh△show△range△-ip△{IP アドレス|ホスト名}△[-login△ユーザ名△パスワード]△[-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード]△[-security△{verify|ignore}]
```

パラメータ

- **-ip**△{IP アドレス|ホスト名}

サービス IP アドレスまたはホスト名を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。

このパラメタは必須です。

- **-login**△ユーザ名△パスワード

エクスポートツール 2 で使用するユーザ ID とパスワードを指定します。

このパラメタは省略可能です。省略した場合、対話形式でユーザ名とパスワードの入力を求められます。

- **-proxy**△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード

Proxy ホスト経由でストレージシステムと通信する環境の場合、Proxy ホストの情報を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。

このパラメタは省略可能です。省略した場合、**-login** パラメタでユーザ名とパスワードを指定してあるときは認証なしプロキシ、**-login** パラメタを省略したとき、および**-proxy** パラメタでユーザ名とパスワードを指定しなかったとき（Proxy ホストの IP アドレスとポート番号だけ指定したとき）は対話形式でプロキシのユーザ名とパスワードの入力を求められます。

- **-security**△{verify|ignore}

証明書検証を実施するかどうかを指定するパラメタです。

このパラメタは省略可能です。省略した場合、または verify を指定した場合は、証明書検証が実施されます。ignore を指定すると証明書を検証しなくなりますが、推奨しません。

実行例

この例では、サービス IP アドレスに IPv4 で「192.168.0.100」、ユーザ ID に「User」、パスワードに「Pass」を指定しています。

```
c:\%export> runWin2.bat△show△range△-ip△192.168.0.100△-login△User△Pass
```

実行結果

```
2017/03/31△12:20:30
2017/03/31△12:25:30
2017/03/31△12:30:30
show△range△command△success
```

4.4.5 性能採取対象 CU 番号確認機能（show cu コマンド）

show cu コマンドは、性能採取対象の CU の一覧を表示する機能です。

構文

Windows の場合

```
runWin2.bat△show△cu△-ip△{IP アドレス|ホスト名}△[-login△ユーザ名△パスワード]△[-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード]△[-security△{verify|ignore}]
```

UNIX の場合

```
runUnix2.sh△show△cu△-ip△{IP アドレス|ホスト名}△[-login△ユーザ名△パスワード]△[-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード]△[-security△{verify|ignore}]
```

パラメタ

- **-ip△{IP アドレス | ホスト名}**
サービス IP アドレスまたはホスト名を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。
このパラメタは必須です。
- **-login△ユーザ名 △パスワード**
エクスポートツール 2 で使用するユーザ ID とパスワードを指定します。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、対話形式でユーザ名とパスワードの入力を求められます。
- **-proxy△{IP アドレス | ホスト名} △ポート番号 △ユーザ名 △パスワード**
Proxy ホスト経由でストレージシステムと通信する環境の場合、Proxy ホストの情報を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、**-login** パラメタでユーザ名とパスワードを指定してあるときは認証なしプロキシ、**-login** パラメタを省略したとき、および**-proxy** パラメタでユーザ名とパスワードを指定しなかったとき（Proxy ホストの IP アドレスとポート番号だけ指定したとき）は対話形式でプロキシのユーザ名とパスワードの入力を求められます。
- **-security△{verify | ignore}**
証明書検証を実施するかどうかを指定するパラメタです。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、または **verify** を指定した場合は、証明書検証が実施されます。**ignore** を指定すると証明書を検証しなくなりますが、推奨しません。

実行例

この例では、サービス IP アドレスに IPv4 で「192.168.0.100」、ユーザ ID に「User」、パスワードに「Pass」を指定しています。

```
c:\Yexport> runWin2.bat△show△cu△-ip△192.168.0.100△-login△User△Pass
```

実行結果

```
CUs△:△00,01,0F  
show△cu△command△success
```

4.4.6 性能採取対象 CU 番号追加機能（add cu コマンド）

add cu コマンドは、性能採取対象の CU を追加する機能です。

性能採取対象の CU を追加すると、蓄積済みの性能情報が破棄されてから、その時点で指定されている CU を対象に、性能情報の蓄積が始まります。蓄積済みの性能情報が事前に必要な場合、性能メトリクスエクスポート機能を使用してエクスポートしてください。



メモ

サンプリング間隔が 5 分、10 分、15 分以外の状態で、性能採取対象 CU 番号が 64 個以下から 65 個以上になる CU 番号の追加はできません。この場合は、サンプリング間隔を 5 分、10 分、15 分のどれかに設定してから、性能採取対象 CU 番号の追加を行ってください（「[4.6 サンプリング間隔との組み合わせによる性能採取対象 CU 番号の変更可否](#)」参照）。

構文

Windows の場合

```
runWin2.bat△add△cu△-ip△{IP アドレス|ホスト名}△[-login△ユーザ名△パスワード]△[-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード]△-cu△CU 番号△-q△[-security△{verify|ignore}]
```

UNIX の場合

```
runUnix2.sh△add△cu△-ip△{IP アドレス|ホスト名}△[-login△ユーザ名△パスワード]△[-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード]△-cu△CU 番号△-q△[-security△{verify|ignore}]
```

パラメタ

- **-ip△{IP アドレス|ホスト名}**
サービス IP アドレスまたはホスト名を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。
このパラメタは必須です。
- **-login△ユーザ名△パスワード**
エクスポートツール 2 で使用するユーザ ID とパスワードを指定します。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、対話形式でユーザ名とパスワードの入力を求められます。
- **-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード**
Proxy ホスト経由でストレージシステムと通信する環境の場合、Proxy ホストの情報を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、**-login** パラメタでユーザ名とパスワードを指定してあるときは認証なしプロキシ、**-login** パラメタを省略したとき、および**-proxy** パラメタでユーザ名とパスワードを指定しなかったとき（Proxy ホストの IP アドレスとポート番号だけ指定したとき）は対話形式でプロキシのユーザ名とパスワードの入力を求められます。
- **-cu△CU 番号**
性能採取対象の CU として追加したい CU 番号を指定します。
 - 16 進数 2 桁で CU 番号を指定します。
 - 複数指定する場合は"00,02"のように","（カンマ）で区切ります。また、"00:09"のように":"（コロン）での範囲指定もできます。複数指定と範囲指定を組み合わせると"00,02,04:09"のように指定することもできます。
 - 指定可能な CU 番号の数は、サンプリング間隔の値によって変わります（「[4.4.3 サンプリング間隔設定機能 \(set interval コマンド\)](#)」を参照）。
- **-q**
省略可能なパラメタです。このパラメタを指定しない場合は、蓄積データの破棄と処理続行を問い合わせるメッセージが表示され、メッセージに対する応答が必要です。このパラメタを指定すると、メッセージおよび応答要求なしにコマンドが実行されます。
- **-security△{verify|ignore}**
証明書検証を実施するかどうかを指定するパラメタです。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、または **verify** を指定した場合は、証明書検証が実施されます。**ignore** を指定すると証明書を検証しなくなりますが、推奨しません。

実行例

この例では、サービス IP アドレスに IPv4 で「192.168.0.100」、ユーザ ID に「User」、パスワードに「Pass」、追加する CU 番号を複数指定と範囲指定を組み合わせで「00,01,05:0A」、メッセージおよび応答要求なしを指定しています。

```
c:\¥export> runWin2.bat△add△cu△-ip△192.168.0.100△-login△User△Pass  
△-cu△00,01,05:0A△-q
```

実行結果

```
add△cu△command△success
```

4.4.7 性能採取対象 CU 番号削除機能（remove cu コマンド）

remove cu コマンドは、性能採取対象の CU を削除する機能です。

性能採取対象の CU を削除すると、蓄積済みの性能情報が破棄されてから、その時点で指定されている CU を対象に、性能情報の蓄積が始まります。蓄積済みの性能情報が事前に必要な場合、性能メトリクスエクスポート機能を使用してエクスポートしてください。



メモ

サンプリング間隔が 5 分、10 分、15 分以外の状態で、性能採取対象 CU 番号が 65 個以上から 64 個以下になる CU 番号の削除はできません。この場合は、サンプリング間隔を 5 分、10 分、15 分のどれかに設定してから、性能採取対象 CU 番号の削除を行ってください（「[4.6 サンプリング間隔との組み合わせによる性能採取対象 CU 番号の変更可否](#)」参照）。

構文

Windows の場合

```
runWin2.bat△remove△cu△-ip△{IP アドレス|ホスト名}△[-login△ユーザ名△パスワード]△  
△[-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード]△-  
cu△CU 番号△-q△[-security△{verify|ignore}]
```

UNIX の場合

```
runUnix2.sh△remove△cu△-ip△{IP アドレス|ホスト名}△[-login△ユーザ名△パスワード]△  
△[-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード]△-  
cu△CU 番号△-q△[-security△{verify|ignore}]
```

パラメタ

- **-ip△{IP アドレス|ホスト名}**
サービス IP アドレスまたはホスト名を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。
このパラメタは必須です。
- **-login△ユーザ名△パスワード**
エクスポートツール 2 で使用するユーザ ID とパスワードを指定します。
このパラメタは省略可能です。省略した場合、対話形式でユーザ名とパスワードの入力を求められます。
- **-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード**
Proxy ホスト経由でストレージシステムと通信する環境の場合、Proxy ホストの情報を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。

このパラメタは省略可能です。省略した場合、**-login** パラメタでユーザ名とパスワードを指定してあるときは認証なしプロキシ、**-login** パラメタを省略したとき、および**-proxy** パラメタでユーザ名とパスワードを指定しなかったとき（Proxy ホストの IP アドレスとポート番号だけ指定したとき）は対話形式でプロキシのユーザ名とパスワードの入力を求められます。

- **-cu△CU 番号**

性能採取対象の CU として削除したい CU 番号を指定します。

- 16 進数 2 桁で CU 番号を指定します。
- 複数指定する場合は"00,02"のように","（カンマ）で区切ります。また、"00:09"のように":"（コロン）での範囲指定もできます。複数指定と範囲指定を組み合わせると"00,02,04:09"のように指定することもできます。
- 指定可能な CU 番号の数は、サンプリング間隔の値によって変わります（[「4.4.3 サンプリング間隔設定機能（set interval コマンド）」](#)を参照）。

- **-q**

省略可能なパラメタです。このパラメタを指定しない場合は、蓄積データの破棄と処理続行を問い合わせるメッセージが表示され、メッセージに対する応答が必要です。このパラメタを指定すると、メッセージおよび応答要求なしにコマンドが実行されます。

- **-security△{verify|ignore}**

証明書検証を実施するかどうかを指定するパラメタです。

このパラメタは省略可能です。省略した場合、または **verify** を指定した場合は、証明書検証が実施されます。**ignore** を指定すると証明書を検証しなくなりますが、推奨しません。

実行例

この例では、サービス IP アドレスに IPv4 で「192.168.0.100」、ユーザ ID に「User」、パスワードに「Pass」、削除する CU 番号を複数指定と範囲指定を組み合わせで「00,01,05:0A」、メッセージおよび応答要求なしを指定しています。

```
c:\¥export> runWin2.bat△remove△cu△-ip△192.168.0.100△-login△User△Pass△-cu△00,01,05:0A△-q
```

実行結果

```
remove△cu△command△success
```

4.4.8 性能メトリクスエクスポート機能（export data コマンド）

export data コマンドは、蓄積されている性能メトリクスデータを CSV 形式でエクスポートする機能です。デフォルトでは ZIP 形式に圧縮して出力しますが、CSV 形式のまま出力することもできます。蓄積データ期間確認機能で表示した期間内で、任意の期間の性能メトリクスを出力できます。

構文

Windows の場合

```
runWin2.bat△export△data△-ip△IP アドレス△[-login△ユーザ名△パスワード]△  
[-proxy△{IP アドレス|ホスト名}△ポート番号△ユーザ名△パスワード]△[-outpath△  
出力先ディレクトリ]△[-range△蓄積データの範囲]△[-group△グループ名]△[-  
option△オプション内容]△[-security△{verify|ignore}]
```

UNIX の場合

```
runUnix2.sh△export△data△-ip△IP アドレス △[-login△ユーザ名 △パスワード] △
[-proxy△{IP アドレス |ホスト名}△ポート番号△ユーザ名 △パスワード] △[-outpath△
出力先ディレクトリ] △[-range△蓄積データの範囲] △[-group△グループ名] △[-
option△オプション内容] △[-security△{verify|ignore}]
```

パラメタ

- ip△{IP アドレス |ホスト名}**
 サービス IP アドレスまたはホスト名を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。
 このパラメタは必須です。
- login△ユーザ名 △パスワード**
 エクスポートツール 2 で使用するユーザ ID とパスワードを指定します。
 このパラメタは省略可能です。省略した場合、対話形式でユーザ名とパスワードの入力を求められます。
- proxy△{IP アドレス |ホスト名}△ポート番号△ユーザ名 △パスワード**
 Proxy ホスト経由でストレージシステムと通信する環境の場合、Proxy ホストの情報を指定します。IP アドレスは IPv6 形式でも指定できます。
 このパラメタは省略可能です。省略した場合、**-login** パラメタでユーザ名とパスワードを指定してあるときは認証なしプロキシ、**-login** パラメタを省略したとき、および**-proxy** パラメタでユーザ名とパスワードを指定しなかったとき（Proxy ホストの IP アドレスとポート番号だけ指定したとき）は対話形式でプロキシのユーザ名とパスワードの入力を求められます。
- outpath△出力先ディレクトリ**
 エクスポートした CSV ファイルまたは圧縮ファイル、およびメタ情報ファイルの出力先ディレクトリを指定します。
 - 最大 150 文字（半角）までのパスを指定できます。相対パスで指定する場合、絶対パスに置き換えたパスの長さがこの上限値を超えないようにしてください。
 - 相対パスで指定できます。
 - ネットワークドライブへの出力はできません。
 - パスに空白を含む場合はダブルクォーテーションで囲んでください。
 - "¥"を指定する場合は、"¥¥"と指定してください。
 このパラメタは省略可能です。省略した場合は、monitor2¥out ディレクトリに出力されます。
- range△蓄積データの範囲**
 エクスポートしたい蓄積データの範囲を年月日時分
 「YYYYMMDDHHMM:YYYYMMDDHHMM」の形式で指定します。
 このパラメタは省略可能です。省略した場合は、ストレージシステムに蓄積されている全データをエクスポートします（最大 1440 プロット分）。なお、蓄積されているデータの差分で性能値を算出するため、出力される性能値は 1 プロット分少なくなります（先頭の時間は出力されません）。
 (例)

```

蓄積データ 10:00 ← 10:05 ← 10:10 ← 10:15 ← 10:20 5プロット分
               |       |       |       |
               ↓       ↓       ↓       ↓
性能値出力   10:05   10:10   10:15   10:20 4プロット分
      
```
- group△グループ名**
 エクスポートしたい蓄積データの性能メトリクスグループ名を指定します。指定できる性能/出力メトリクスグループ名は次のとおりです。

- **MPU**
- **Cache**
- **ParityGroup**
- **LDEV**
- **LU**
- **Port**
- **PortError**
- **BackendPort**
- **TrueCopy**
- **UR**
- **AccessPath**

複数のグループを指定する場合は、空白を空けて、グループ名称を列挙してください（例：**MPU△Cache△ParityGroup**）。

このパラメタは省略可能です。省略した場合は、全グループをエクスポートします。

- **-option△オプション内容**

データをエクスポートする際のオプションを指定します。指定できるオプションは次のとおりです。

- **ask**

同じ名前のファイルまたはサブディレクトリがあった場合は、ファイルを削除してもよいかをユーザへ問い合わせます。このオプションを省略した場合は、**clear** と同じ動作になります。

- **clear**

保存先ディレクトリにある同一ファイル名の CSV ファイルおよび ZIP ファイルは削除されます。**nocompress** 指定時は同一ファイル名の CSV ファイルに対応する ZIP ファイルも削除されます。**compress** 指定時は同一ファイル名の ZIP ファイルに対応する CSV ファイルも削除されます。

- **compress**

エクスポートするデータ（性能情報の CSV ファイルとメタ情報ファイル）を ZIP 形式で圧縮します。

- **nocompress**

エクスポートするデータを圧縮しません。このオプションを省略した場合は、**compress** と同じ動作になります。

- **resourceid_on_row**

このオプションを指定すると、エクスポートするデータ（性能情報の CSV ファイル）フォーマットとして、リソース（例えば、ポート）の ID が行方向に出力されます。このため 1 レコードが、採取時刻、リソースごとの性能情報を示します。

- **resourceid_on_row** または **resourceid_on_column** のどちらも指定しない場合は、**resourceid_on_row** を指定した場合のフォーマットで出力されます。

出力される CSV ファイル例

```
"Date","Time","ID","Total_IOPS"
"2017/07/10","18:00","CL1-A/1122334455667788<HOST_A>","10"
"2017/07/10","18:00","CL1-A/1122334455667788<HOST_A>","10"
```

- **resourceid_on_column**

このオプションを指定すると、エクスポートするデータ（性能情報の CSV ファイル）フォーマットとして、リソース（例えば、ポート）の ID が列方向に出力されます。このため、1 レコードが、同時刻に採取した複数のリソース（例えば、各ポート）の性能情報を示します。

- **resourceid_on_row** または **resourceid_on_column** のどちらも指定しない場合は、**resourceid_on_row** を指定した場合のフォーマットで出力されます。

出力される CSV ファイル例

```
Total_IOPS.csv
Serial Number : 900001(VSP One B85)
From : 2021/09/20 23:40
To   : 2021/09/20 23:45
Sampling : 5
"Date","Time","CL1-A/1122334455667788<HOST_A>","CL1-A/
1122334455667788<HOST_A>"
"2021/09/20","23:40","10","10"
"2021/09/20","23:45","10","10"
```

- **-security{verify|ignore}**

証明書検証を実施するかどうかを指定するパラメータです。

このパラメータは省略可能です。省略した場合、または **verify** を指定した場合は、証明書検証が実施されます。**ignore** を指定すると証明書を検証しなくなりますが、推奨しません。

実行例

この例では、サービス IP アドレスに IPv4 で「192.168.0.100」、ユーザ ID に「User」、パスワードに「Pass」、データのエクスポート先に「c:¥¥exportlog」、エクスポート範囲に 2017 年 4 月 6 日 12 時から 2017 年 4 月 6 日 13 時、性能メトリクスグループに「MPU ParityGroup LDEV LU Port PortError BackendPort TrueCopy UR」、オプションに **nocompress** と **clear** を指定しています。

```
c:¥¥export> runWin2.bat△export△data△-ip△192.168.0.100△-
login△User△Pass△-outpath△c:¥¥exportlog△-
range△201704061200:201704061300△-
group△MPU△ParityGroup△LDEV△LU△Port△PortError△BackendPort△TrueCopy△U
R△-option△nocompress△clear
```

実行結果

```
Start△export△performance△data
+---+---+---+---+---+---+---+---+---+---+
=====> 65.0%
```

4.4.9 ヘルプ機能（help コマンド）

help コマンドは、エクスポートツール 2 で使用できるコマンドやオプションの一覧を表示する機能です。

構文

Windows の場合

```
runWin2.bat△help
```

UNIX の場合

```
runUnix2.sh△help
```

4.5 無効なモニタリングデータとデータが出力されない原因

CSV ファイルに保存されたモニタリングデータの値が 0 未満の場合の原因を説明します。

CSV ファイル内のモニタリングデータの値	解説
-1	次の理由で性能メトリクスが取得できなかった場合に「-1」が出力されます。 ・ 計算不可 (0 除算など) ・ 「-3」が出力される以外の場合
-3	IOPS が 0 の場合、LU、LDEV、Port、外部接続ボリュームのモニタリングデータに含まれるレスポンスタイムの値は「-3」になります。IOPS が 0 のため、平均レスポンスタイムが無効な値であることを意味します。また、Port の MFTarget のモニタリングデータに含まれる CMR 処理時間、切断時間、接続時間の値は「-3」になります。IOPS が 0 のため、平均時間が無効な値であることを意味します。

エクスポートツール 2 は、対象のモニタリングデータが採取できなくても処理を続行します。

- ・ エクスポートツール 2 に指定したモニタリングデータの採取期間が、実際に蓄積されたモニタリングデータの採取期間から外れている場合、その期間のモニタリングデータは出力されません。ストレージ側は、定期的にモニタリングデータを蓄積します。エクスポートツール 2 を実行するタイミングによっては、最も古い日時のデータが上書きされ、エクスポートツール 2 の実行中に、時間の経過とともに蓄積期間範囲外になり、最も古い日時のデータが出力されないことがあります。
- ・ ストレージシステムが再起動中、ストレージシステムに高い負荷がかかっている、および一時的なネットワークエラーにより、モニタリングデータを採取できないことがあります。
 - ・ 一部のモニタリングデータを採取できない場合、採取できなかった部分の性能メトリクスは出力されません。
 - ・ 一部のプロットのモニタリングデータを採取できない場合、そのプロットの性能メトリクスは出力されません。

4.6 サンプリング間隔との組み合わせによる性能採取対象 CU 番号の変更可否

次に示す性能採取対象 CU 番号の変更をすると、メッセージ ID : 8005 が表示され、コマンドが失敗します。

- ・ サンプリング間隔が 5 分、10 分、15 分以外の状態で、性能採取対象 CU 番号が 64 個以下から 65 個以上になる CU 番号の追加を行う。
- ・ サンプリング間隔が 5 分、10 分、15 分以外の状態で、性能採取対象 CU 番号が 65 個以上から 64 個以下になる CU 番号の削除を行う。

対処方法

サンプリング間隔を 5 分、10 分、15 分のどれかに設定してから、性能採取対象 CU 番号の追加または削除を行ってください。

サンプリング間隔との組み合わせによる、性能採取対象 CU 番号の変更可否（64 個以下から 65 個以上に変更、65 個以上から 64 個以下に変更）を示します。サンプリング間隔、性能採取対象 CU 番号の参照および変更については「[4.4 コマンドリファレンス](#)」を参照してください。

現在設定されている サンプリング間隔（分）	64 個以下から 65 個以上に 採取対象 CU 数を変更	65 個以上から 64 個以下に 採取対象 CU 数を変更
1,2,3,4	×	—
5	○※	○※
6,7,8,9	×	—
10	○※	○※
11,12,13,14	×	—
15	○※	○※
20,25,30,35,40,45,50,55,60	—	×

凡例

- ：変更できる
- ×
- ：変更前の設定として存在しない組み合わせ

注※

蓄積済みの性能情報が破棄されてから、設定変更後の CU 番号を対象に性能情報の蓄積が始まります。蓄積済みの性能情報が事前に必要な場合、性能メトリクスエクスポート機能を使用してエクスポートしてください。

エクスポートツール 2 のトラブルシューティング

この章では、エクスポートツール 2 で発生しうるトラブルと、その解決方法について説明します。

- [5.1 エクスポートツール 2 のコマンド実行時に関するトラブルシューティング](#)
- [5.2 エクスポートツール 2 のエラーメッセージ一覧](#)
- [5.3 エクスポートツール 2 のログ](#)
- [5.4 お問い合わせについて](#)

5.1 エクスポートツール 2 のコマンド実行時に関するトラブルシューティング

エクスポートツール 2 のコマンド実行時に、Java が表示するエラーメッセージを次に示します。

メッセージ	原因と対策
Unrecognized option: --add-opens=java.base/sun.net.www.protocol.https=ALL-UNNAMED Error: Could not create the Java Virtual Machine. Error: A fatal exception has occurred. Program will exit.	JRE のバージョンが 8.0 の環境で、runWin2.bat または runUnix2.sh を実行したため、エラーが発生しました。JRE をバージョンアップするか runWin.bat または runUnix.sh を使用してください。
Execution stops.	JRE のバージョンが 17.0、または 21.0 の環境で、サンプリング間隔設定機能（set interval コマンド）を実行したため、エラーが発生しました。runWin2.bat または runUnix2.sh を使用してください。

5.2 エクスポートツール 2 のエラーメッセージ一覧

エクスポートツール 2 が出力するエラーメッセージを次に示します。

メッセージ ID	メッセージ	対処
0001	If you change the current setting of the sampling interval or the number of CUs, the accumulated data will be reset. To check the current setting, run the show interval command or the show cu command. Are you sure you want to change the settings? To change the setting, enter y. To cancel, enter n.	設定を変更する場合は'y'を、変更しない場合は'n'を入力してください。
1000	The export tool was forcibly terminated.	もう一度操作する場合は、コマンドを再実行してください。
1001	The export tool cannot delete the log file [< xxx >].	削除されていない古いログがあります。確認してください。
1002	The < xxx > cannot be found, or the file cannot be loaded. Verify the operating procedure by referring to the manual.	カレントディレクトリをエクスポートツール 2 のインストール先ディレクトリに変更してから、バッチファイルを実行してください（「 4.1 エクスポートツール 2 の実行 」の実行例を参照）。
2000	No command is specified.	エクスポートツール 2 実行時のコマンド指定を見直した後、再実行してください。
2001	The export tool does not support the specified command.	エクスポートツール 2 実行時のコマンド指定を見直した後、再実行してください。

メッセージ ID	メッセージ	対処
2002	The exportTool.properties file does not exist.	エクスポートツール 2 が格納されているメディアから exportTool.properties をコピーして、必要な設定をしてください。
2003	The export tool cannot read the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルに対して次の内容を確認してから、再実行してください。 - ファイルがロック中または編集集中でないこと。 - ファイルが破損していないこと。破損している場合、エクスポートツール 2 が格納されているメディアから exportTool.properties ファイルをコピーし、必要な設定をしてください。
2004	The export tool cannot close the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルがロック中、または編集集中でないことを確認して、再実行してください。
2005	The value specified for gumjsonapi.timeout in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの gumjsonapi.timeout 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2006	Only a numerical value can be specified for gumjsonapi.timeout in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの gumjsonapi.timeout 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2007	The value specified for gumjsonapi.maxRetryCount in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの gumjsonapi.maxRetryCount 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2008	Only a numerical value can be specified for gumjsonapi.maxRetryCount in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの gumjsonapi.maxRetryCount 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2009	The value specified for gumjsonapi.retryInterval in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの gumjsonapi.retryInterval 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2010	Only a numerical value can be specified for gumjsonapi.retryInterval in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの gumjsonapi.retryInterval 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2011	The value specified for restapi.timeout in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの restapi.timeout 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2012	Only a numerical value can be specified for restapi.timeout in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの restapi.timeout 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2013	The value specified for restapi.maxRetryCount in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの restapi.maxRetryCount 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2014	Only a numerical value can be specified for restapi.maxRetryCount in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの restapi.maxRetryCount 項目に設定している内容を確認して、修正してください。

メッセージID	メッセージ	対処
2015	The value specified for restapi.retryInterval in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの restapi.retryInterval 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2016	Only a numerical value can be specified for restapi.retryInterval in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの restapi.retryInterval 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2017	The value specified for dumpapi.timeout in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの dumpapi.timeout 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2018	Only a numerical value can be specified for dumpapi.timeout in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの dumpapi.timeout 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2019	The value specified for dumpapi.maxRetryCount in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの dumpapi.maxRetryCount 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2020	Only a numerical value can be specified for dumpapi.maxRetryCount in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの dumpapi.maxRetryCount 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2021	The value specified for dumpapi.retryInterval in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの dumpapi.retryInterval 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2022	Only a numerical value can be specified for dumpapi.retryInterval in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの dumpapi.retryInterval 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2023	exportdata.protocol is not set in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの exportdata.protocol 項目を設定してください。
2024	The protocol specified for exportdata.protocol in the exportTool.properties file is not supported.	exportTool.properties ファイルの exportdata.protocol 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2025	exportdata.portNumber is not set in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの exportdata.portNumber 項目を確認して、値を設定してください。
2026	The value specified for exportdata.portNumber in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの exportdata.portNumber 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2027	Only a numerical value can be specified for exportdata.portNumber in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの exportdata.portNumber 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2028	exportdata.isCsvHeader is not set in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの exportdata.isCsvHeader 項目を確認して、値を設定してください。

メッセージID	メッセージ	対処
2029	The value specified for exportdata.isCsvHeader in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの exportdata.isCsvHeader 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2030	log.level is not set in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの log.level 項目を確認して、値を設定してください。
2031	The log level specified for log.level in the exportTool.properties file is not supported.	exportTool.properties ファイルの log.level 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2032	log.directory is not set in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの log.directory 項目を確認して、値を設定してください。
2033	product.type is not set in the exportTool.properties file.	再実行しても、エラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
2034	The product type specified for product.type in the exportTool.properties file is not supported.	再実行しても、エラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
2035	The value specified for log.keepPeriod in the exportTool.properties file is outside the valid range.	exportTool.properties ファイルの log.keepPeriod 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2036	Only a numerical value can be specified for log.keepPeriod in the exportTool.properties file.	exportTool.properties ファイルの log.keepPeriod 項目に設定している内容を確認して、修正してください。
2050	No IP address is specified for -ip.	コマンドパラメタ"-ip"を指定してください。
2051	The number of IP addresses specified for -ip is not correct.	コマンドパラメタ"-ip"の引数指定を確認して、再実行してください。
2053	The number of user IDs or passwords specified for -login is not correct.	コマンドパラメタ"-login"の引数指定を確認して、再実行してください。
2054	The number of IP addresses, ports, user IDs, or passwords specified for -proxy is not correct.	コマンドパラメタ"-proxy"の引数指定を確認して、再実行してください。
2055	Only numerical values can be specified for port-number of -proxy.	コマンドパラメタ"-proxy"に指定したポート番号の内容を確認して、再実行してください。
2056	A value specified for port-number of -proxy is outside the valid range.	コマンドパラメタ"-proxy"に指定したポート番号の内容を確認して、再実行してください。
2057	No sampling interval is specified for -interval.	コマンドパラメタ"-interval"を指定してください。
2058	The number of sampling intervals specified for -interval is not correct.	コマンドパラメタ"-interval"の引数指定を確認して、再実行してください。
2059	A value specified for -interval is outside the valid range.	コマンドパラメタ"-interval"に指定した値の内容を確認して、再実行してください。
2060	Only numerical values can be specified for -interval.	コマンドパラメタ"-interval"に指定した値の内容を確認して、再実行してください。
2061	The number of output directories specified for -outpath is not correct.	コマンドパラメタ"-outpath"の引数指定を確認して、再実行してください。

メッセージID	メッセージ	対処
2062	The number of dates and times specified for -range is not correct.	コマンドパラメタ"-range"の引数指定を確認して、再実行してください。
2063	The format of a date and time specified for -range is not correct.	コマンドパラメタ"-range"の引数指定を確認して、再実行してください。
2064	A time earlier than the start time is specified for the end time for -range.	コマンドパラメタ"-range"の時刻指定を確認して、再実行してください。
2065	The format of a date specified for -range is not correct.	コマンドパラメタ"-range"の日付指定を確認して、再実行してください。
2066	The number of group names specified for -group exceeds the maximum or no group name is specified.	コマンドパラメタ"-group"の引数指定を確認して、再度コマンドを入力してください。
2067	An unsupported group is specified for -group.	コマンドパラメタ"-group"にて指定しているグループを確認して、再実行してください。
2068	The number of options specified for -option exceeds the maximum or no option is specified.	コマンドパラメタ"-option"の引数指定を確認して、再度コマンドを入力してください。
2069	"ask" and "clear" cannot be set in -option at the same time.	コマンドパラメタ"-option"にて指定している引数指定を確認して、再実行してください。
2070	"compress" and "nocompress" cannot be specified at the same time for -option.	コマンドパラメタ"-option"にて指定している引数指定を確認して、再実行してください。
2071	The option specified for -option is not supported.	コマンドパラメタ"-option"にて指定している引数指定を確認して、再実行してください。
2072	"resourceid_on_column" and "resourceid_on_row" cannot be specified for the command parameter -option at the same time.	コマンドパラメタ"-option"にて指定している引数指定を確認して、再実行してください。
2073	If false is specified for exportdata.isCsvHeader in the exportTool.properties file, "resourceid_on_column" cannot be specified for the command parameter -option.	exportTool.properties ファイルの "exportdata.isCsvHeader"の引数指定と、コマンドパラメタ"-option"の引数指定を確認して、再実行してください。
2074	The number of values specified for -security is not correct.	コマンドパラメタ"-security"にて指定している引数指定を確認して、再実行してください。
2075	The value specified for the certificate verification option -security is not valid. Specify "verify" or "ignore". (cmd value securityVerify = <xxx>)	コマンドパラメタ"-security"にて指定している引数指定を確認して、再実行してください。
2089	The export tool does not support the specified command.	指定したコマンドを確認して、再実行してください。
2090	A response that is not "c" for clear(c) or "s" for stop(s) is entered.	コマンドの応答は、'c' または's'を入力してください。
2091	A response that is not "y" or "n" is entered.	コマンドの応答は、'y' または'n'を入力してください。

メッセージID	メッセージ	対処
2092	An error occurred. (details = < xxx >)	< xxx >部分に出力されている内容を確認して、下記の対応を行ってください。 1. ManagerFactory...のメッセージが出力されている場合 a. ログ出力先 (log.directory) の指定が有効なパス名になっているか確認してください。 b. ログ出力先 (log.directory) に指定しているパスが長すぎないか確認してください。 c. UNIX 系 OS の場合、ログ出力先 (log.directory) に対するアクセス権があることを確認してください。 d. エクスポートツール 2 を実行するために必要な空きディスク容量が確保できているか確認してください。 2. Error writing to stream...のメッセージが出力されている場合 エクスポートツール 2 実行中に空きディスク容量の不足が発生しているため、必要な空きディスク容量を確保して、再度エクスポートツール 2 を実行してください。 上記 1、2 以外の場合は再実行してください。再実行してもエラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
2093	No values are specified for the command parameter -cu.	コマンドパラメタ"-cu"の引数指定を確認して、再実行してください。
2094	The format of the argument specified for the command parameter -cu is not correct.	コマンドパラメタ"-cu"の引数指定を確認して、再実行してください。
4001	Valid plot data does not exist.	エクスポートツール 2 に指定するパラメータを確認して、再実行してください。
5000	A CSV file cannot be exported. (details = < xxx >)	メッセージの詳細部分に出力されている内容を確認して、必要な対応をしてください。その後、エクスポートを再実行してください。
5001	A CSV file cannot be compressed. (details = < xxx >)	メッセージの詳細部分に出力されている内容を確認して、必要な対応をしてください。その後、エクスポートを再実行してください。
5002	A different performance metrics export processing is running for the specified storage system.	すでに実行されている性能メトリクスエクスポート機能が終了するのを待ってから、再実行してください。
5003	The specified command cannot be run, because the target storage system does not support the command.	コマンドパラメタ"-ip"で指定したストレージシステムがコマンドをサポートしていない可能性があります。引数指定を確認してください。
7000	The export operation was stopped because of an interruption to the system caused by a forced termination or a system failure.	もう一度操作する場合は、コマンドを再実行してください。

メッセージ ID	メッセージ	対処
7001	A one-time password (SSO key) cannot be obtained. (error code = < xxx >, details = < xxx >, solution = < xxx >)	メッセージの詳細部分に出力されている内容を確認して、必要な対応をしてください。その後、コマンドを再実行してください。
7002	The monitor data header for performance data (< xxx >) does not exist.	再実行しても、エラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
7003	The divided monitor data header for performance data (< xxx >) does not exist.	再実行しても、エラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
7004	The collection result of performance data (< xxx >) is an error.	再実行しても、エラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
7005	The divided collection result of performance data (< xxx >) is an error.	再実行しても、エラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
7006	Communication is being retried. (< xxx >/< xxx >)	処理が終わるまで、しばらくお待ちください。
7007	Damaged compression dump data is detected. (details = < xxx >)	メッセージの詳細部分に出力されている内容を確認してください。メッセージの詳細部分に「Plot data skipped for invalidity.」が出力されて処理が中断されている場合は、プロットの性能情報が更新中の可能性があります。コマンドを再実行すると解消されます。再実行しても、エラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
7008	The data to be obtained is < xxx > bytes more than expected so that the excess data is deleted.	再実行しても、エラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
7009	The data to be obtained is < xxx > bytes less than expected so that the insufficient part of the data is zero padded.	再実行しても、エラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
8000	An unexpected error occurred. (details = < xxx >)	エクスポートツール 2 が出力した CSV ファイル、ZIP ファイルおよびログファイルを退避してから、再実行してください。再実行してもエラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
8002	Time data could not be parsed, because the data is not valid. (details = < xxx >)	エクスポートツール 2 が出力した CSV ファイル、ZIP ファイルおよびログファイルを退避してから、再実行してください。再実行してもエラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
8003	The export operation cannot be performed, because the export tool does not support this version of plot data.	使用しているエクスポートツール 2 のバージョンが正しいかを確認してください。
8004	The export operation cannot be performed, because the export tool does not support the model of the storage system (< xxx >).	通信先のストレージシステムのモデルで、エクスポートツール 2 を使用できるかを確認してください。

メッセージID	メッセージ	対処
8005	An invalid request (HTTP error) occurred. (URL = < xxx >, HTTP status code = < xxx >, details = < xxx >)	<xxx>の部分以降に出力されている内容を確認して対処してください。回復しない場合は次の対処を実施してください。 「3.1 エクスポートツール 2 の要件」を参照して、使用している DKCMAIN プログラムバージョンに対応したエクスポートツール 2 のバージョンがインストールされているか確認してください。未対応のバージョンだった場合は、対応するバージョンをインストールしてから再実行してください。 - 通信先のストレージシステムのマイクロプログラムバージョンが古いのか、ESM のマイクロプログラムバージョンと一致していない可能性があります。ストレージシステムおよび ESM のマイクロプログラムバージョンを確認して、適切なマイクロプログラムバージョンに更新してから、再実行してください。 - コマンドを実行したコンピュータとストレージシステム間の通信環境を確認して、再実行してください。 - サンプリング間隔と性能採取対象 CU 番号の数の組み合わせが正しくない可能性があります。 - 性能採取対象 CU 番号の変更時 「4.6 サンプリング間隔との組み合わせによる性能採取対象 CU 番号の変更可否」に従って対処してください。 - サンプリング間隔の変更時 指定したサンプリング間隔を確認してください。 指定可能なサンプリング間隔を示します。 性能採取対象 CU が 64 個以下の場合：1 分～15 分（1 分単位） 性能採取対象 CU が 65 個以上の場合：5 分～60 分（5 分単位） - HTTP Status code に 503 が出力された場合は、ESM が起動中またはビジー状態の可能性があります。しばらく時間を空けてから再実行してください。再実行してもエラーが発生する場合は、対象の ESM をリブートしてから再実行してください。ESM をリブートしてもエラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
8006	An authentication error occurred. (URL = < xxx >, HTTP status code = < xxx >, details = < xxx >)	エクスポートツール 2 に指定するパラメータおよびストレージシステムとの間の通信環境を確認して、再実行してください。
8007	A role error (permission error) occurred. (URL = < xxx >, HTTP status code = < xxx >, details = < xxx >)	ユーザのロールを確認してください。エクスポートツール 2 を実行するユーザには、「ストレージ管理者（パフォーマンス管理）」ロールを割り当ててください。
8008	The JSON parser cannot parse the JSON response text. (details = < xxx >, JSON response text = < xxx >)	エクスポートツール 2 が出力した CSV ファイル、ZIP ファイルおよびログファイルを退避してから、再実行してください。再実行してもエラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。

メッセージ ID	メッセージ	対処
8009	The export tool cannot initialize communication. (storage system host = < xxx >)	ストレージシステムとの間の通信環境を確認して、再実行してください。
8010	The protocol or the port number set in exportTool.properties, or the host name specified as a parameter is not valid. (protocol = < xxx >, storage system host = < xxx >, port number = < xxx >, details = < xxx >)	exportTool.properties に設定された値と、エクスポートツール 2 に指定するパラメータおよびストレージシステムとの間の通信環境を確認して、再実行してください。
8011	An error occurred. (details = < xxx >)	次の操作をしてから、再実行してください。 - エクスポートツール 2 が出力した CSV ファイル、ZIP ファイルおよびログファイルを退避してください。 - ストレージシステムとの間の通信環境を確認してください。 再実行しても、エラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
8012	The protocol or the port number set in exportTool.properties, or the host name, the proxy host name, or the proxy port number specified as a parameter is not valid. (protocol = < xxx >, storage system host = < xxx >, port number = < xxx >, proxy host = < xxx >, proxy port number = < xxx >, details = < xxx >)	exportTool.properties に設定された値と、エクスポートツール 2 に指定するパラメータおよびストレージシステムとの間の通信環境を確認して、再実行してください。
8014	An API server error (HTTP error) occurred. (URL = <xxx>, HTTP Status-Code = <xxx>, details = <xxx>)	<xxx>の部分以降に出力されている内容を確認して対処してください。回復しない場合は次の対処を実施してください。 - 通信先のストレージシステムのマイクロプログラムバージョンが古いか、ESM のマイクロプログラムバージョンと一致していない可能性があります。ストレージシステムおよび ESM のマイクロプログラムバージョンを確認して、適切なマイクロプログラムバージョンに更新してから、再実行してください。 - コマンドを実行したコンピュータとストレージシステム間の通信環境を確認して、再実行してください。 - HTTP Status code に 503 が出力された場合、ESM が起動中またはビジー状態の可能性があります。その後、メッセージ ID7006 が出力された場合、エクスポートツール 2 がリトライを実施したことを示します。処理継続中なので、エクスポートツール 2 の処理が終了するまでお待ちください。 Execution stops. が出力された場合、エクスポートツール 2 が異常終了したことを示します。その場合、「2.2 保守作業時の性能情報の注意事項」の注意事項に記載されている操作が実施されていないか確認してください。 問題解消後、コマンドを再実行してください。

メッセージ ID	メッセージ	対処
		再実行してもエラーが発生する場合は、対象の ESM をリブートしてから再実行してください。 ESM をリブートしてもエラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
8015	An error occurred when the command was run. (details = < xxx >)	メッセージの詳細部分に出力されている内容を確認して、必要な対応をしてください。その後、コマンドを再実行してください。
8016	TLS communication with the server could not be established. (protocol = <xxx>, storage system host = <xxx>, port = <xxx>, proxy host = <xxx>, proxy port = <xxx>, details = <xxx>)	<xxx>の部分以降に出力されている内容を確認して対処してください。回復しない場合は次の項目を見直してください。 - 正しいホスト名または IP アドレスを指定していること。 - 有効なルート証明書、中間 CA、またはサーバ証明書であること。 - サーバのホスト名または IP アドレスが、サーバ証明書の SAN (Subject Alternative Name) エントリと一致していること。 - 証明書チェーンの階層数が、20 を超えていないこと。 - 証明書が有効期限内であること。 - 中間 CA 証明書またはサーバ証明書の CRL 配布点の設定で、1 つの証明書に対して CRL 配布点の URL が 1 つだけ記載されていること。1 つの証明書に対して CRL 配布点の URL が複数設定されている場合、エクスポートツール 2 は使用できません。 - TLS セキュリティ設定で選択したプロトコル、暗号スイートまたは鍵交換下限鍵長が、お使いの JRE でサポートされていること。サポートされていない場合は、サポートされている JRE をインストールしてエクスポートツール 2 を実行してください。 - JRE のバージョンがサポートするプロトコル、暗号スイートまたは鍵交換下限鍵長であること。 - すべての証明書が X.509v3 規格に準拠していること。 再実行しても、エラーが発生する場合は、マニュアルに記載する問い合わせ先に連絡してください。
8021	The server certificate is missing the Server Authentication purpose (OID: 1.3.6.1.5.5.7.3.1) in the extendedKeyUsage extension. Verify that the extendedKeyUsage extension includes the Server Authentication purpose (OID: 1.3.6.1.5.5.7.3.1). (protocol = <xxx>, storage system host = <xxx>, port number = <xxx>, proxy host = <xxx>, proxy port number = <xxx>)	extendedKeyUsage に Server Authentication Purpose (OID : 1.3.6.1.5.5.7.3.1) が含まれていることを確認してください。

メッセージ ID	メッセージ	対処
8022	The intermediate CA certificate is missing the basicConstraints extension with the CA flag set to TRUE. Verify that the intermediate CA certificate contains the basicConstraints extension with the CA flag set to TRUE, indicating that the intermediate CA certificate is a CA certificate. (protocol = <xxx>, storage system host = <xxx>, port number = <xxx>, proxy host = <xxx>, proxy port number = <xxx>)	中間 CA に、CA フラグが TRUE に設定された basicConstraints 拡張機能が含まれていること、および中間 CA が CA 証明書であることを確認してください。
8023	The server certificate is missing the basicConstraints extension with the CA flag set to FALSE. Verify that the server certificate contains the basicConstraints extension with the CA flag set to FALSE, indicating that the server certificate is not a CA certificate. (protocol = <xxx>, storage system host = <xxx>, port number = <xxx>, proxy host = <xxx>, proxy port number = <xxx>)	サーバー証明書に、CA フラグが FALSE に設定された basicConstraints 拡張機能が含まれていること、およびサーバー証明書が CA 証明書ではないことを確認してください。
8024	One or more server certificates or intermediate CA certificates are not in the X.509 version 3 (X.509v3) format. Verify that all server certificates and intermediate CA certificates comply with the X.509 version 3 (X.509v3) standard. Replace non-compliant certificates with X.509v3-compliant certificates. (protocol = <xxx>, storage system host = <xxx>, port number = <xxx>, proxy host = <xxx>, proxy port number = <xxx>)	すべてのサーバー証明書および中間 CA 証明書が、X.509v3 規格に準拠していることを確認してください。準拠していない証明書は、X.509v3 に準拠した証明書に交換してください。
8025	One or more server certificates in the chain are signed with an unsupported signature algorithm. Verify that all server certificates are signed using a signature algorithm supported by the server. (protocol = <xxx>, storage system host = <xxx>, port number = <xxx>, proxy host = <xxx>, proxy port number = <xxx>)	すべてのサーバー証明書が、サーバーでサポートされている署名アルゴリズムで署名されていることを確認してください。
8026	One or more server certificates use unsupported key configurations.	すべてのサーバー証明書が、サーバーでサポートされている鍵長を使用していることを確認してください。

メッセージ ID	メッセージ	対処
	Verify that all server certificates use key configurations supported by the server. (protocol = <xxx>, storage system host = <xxx>, port number = <xxx>, proxy host = <xxx>, proxy port number = <xxx>)	
8027	One or more server certificates use an unsupported hash algorithm. Verify that all server certificates use a hash algorithm supported by the server. (protocol = <xxx>, storage system host = <xxx>, port number = <xxx>, proxy host = <xxx>, proxy port number = <xxx>, details = <xxx>)	すべてのサーバ証明書が、サーバでサポートされているハッシュアルゴリズムを使用していることを確認してください。
8028	One or more server certificates or intermediate CA certificates have been revoked according to CRL or OCSP validation. Verify that all server certificates and intermediate CA certificates are valid and not revoked. If any certificates are revoked, obtain new and valid certificates from the issuing authority. (protocol = <xxx>, storage system host = <xxx>, port number = <xxx>, proxy host = <xxx>, proxy port number = <xxx>, details = <xxx>)	すべてのサーバ証明書および中間 CA が有効であり、失効していないことを確認してください。証明書が失効した場合は、証明書の発行元に問い合わせ有効な証明書を取得し、証明書を更新してください。
8029	The keyCertSign bit is not set in the keyUsage extension of the intermediate CA certificate. This bit is required for signing other certificates. Verify that the keyCertSign bit is set in the keyUsage extension of the intermediate CA certificate so that it can properly issue and sign certificates. (protocol = <xxx>, storage system host = <xxx>, port number = <xxx>, proxy host = <xxx>, proxy port number = <xxx>)	中間 CA が適切に証明書を発行・署名できるように、keyUsage に keyCertSign が設定されていることを確認してください。
8034	The certificate cannot be validated. Verify that the root certificate is imported. (protocol = <xxx>, storage system host = <xxx>, port number = <xxx>, proxy host = <xxx>, proxy port number = <xxx>, details = <xxx>)	ルート証明書がインポートされていることを確認してください。

5.3 エクスポートツール 2 のログ

エクスポートツール 2 のログは<エクスポートツール 2 のインストール先ディレクトリ>
¥monitor2¥log ディレクトリに出力されます。

ログファイルはコマンドの実行単位で生成されます。次に示すとおり、ログファイル名は実行日時
と実行機能でそれぞれ生成されます。

機能	ログファイル名 称に付与される 機能名	ログファイル名
サンプリング間隔確認機能	show_interval	YYYYMMDD_HHMMSS_show_interval.log
サンプリング間隔設定機能	set_interval	YYYYMMDD_HHMMSS_set_interval.log
蓄積データ期間確認機能	show_range	YYYYMMDD_HHMMSS_show_range.log
性能採取対象 CU 番号確認機能	show_cu	YYYYMMDD_HHMMSS_show_cu.log
性能採取対象 CU 番号追加機能	add_cu	YYYYMMDD_HHMMSS_add_cu.log
性能採取対象 CU 番号削除機能	remove_cu	YYYYMMDD_HHMMSS_remove_cu.log
性能メトリクスエクスポート機能	export_data	YYYYMMDD_HHMMSS_export_data.log

なお、ヘルプ機能はログを出力しません。

ログのフォーマットと出力する項目は次のとおりです。

[xxxxxx] [YY/MM/DD-HH:MM:SS] △[ログレベル] △[mmm] △{クラス名::メソッド名} △: △
ログメッセージテキスト

凡例

xxxxxx : スレッド ID

mmm : メッセージ ID

△ : 半角スペース

ログ出力項目	フォーマット
日時	YYYY/MM/DD-HH:MM:SS
スレッド ID	スレッド ID (10 進数 5 桁)
ログレベル(種別)	INFO、WARN、ERROR、DEBUG
メッセージ ID	メッセージ ID (10 進数 4 桁)
クラス名、メソッド名	クラス名::メソッド名
メッセージテキスト	任意のメッセージテキスト

ログファイルの増加によるマシンのストレージ容量が圧迫されるのを防ぐため、古いログファイル
は自動的に削除されます。

- ・ コマンド実行ごとに、プロパティファイル (exportTool.properties) のログ出力先
(log.directory) に設定されているディレクトリにコマンド実行日より 1 ヶ月以上前のログ
が存在する場合は、ログファイルが自動的に削除されます。

- ログの削除に失敗した場合は、ログファイルへ削除が失敗したメッセージ（Warning レベル）が出力され、処理が継続されます。

5.4 お問い合わせについて

お問い合わせ時には、次の情報をご提供ください。

- エクスポートツール 2 をセットアップした OS 情報
- エクスポートツール 2 のバージョン（エクスポートツール 2 実行時、ログファイルにバージョンが出力されます）
- JRE のバージョン（`java -version` コマンドの実行によって確認できます）
- エクスポートツール 2 のログファイル
- 性能情報の CSV ファイルまたは性能情報の ZIP ファイル
- ストレージシステムのダンプファイル（ESM のダンプファイル）
- Windows マシンを使用している場合は、Windows Event Log
- UNIX マシンを使用している場合は、System Log

お問い合わせ先

- 保守契約をされているお客様は、以下の連絡先にお問い合わせください。
日立サポートサービス：<http://www.hitachi-support.com/>
- 保守契約をされていないお客様は、担当営業窓口にお問い合わせください。

構成別のエクスポートツール 2 の要件と所要時間

構成別のエクスポートツール 2 の要件と所要時間について説明します。

□ A.1 構成別のエクスポートツール 2 の要件と所要時間

A.1 構成別のエクスポートツール 2 の要件と所要時間

エクスポートツール 2 は定期的（1 日に 1 回や週に 1 回など）に、夜間または休日にバックグラウンドで起動することを想定しています。

ストレージシステムのリソース数（LDEV 数や LU 数など）や、性能情報の記録間隔および性能採取対象の CU 数によって必要になるメモリとストレージ空き容量、エクスポートに必要な時間が異なります。

構成別のエクスポートツール 2 の要件と所要時間の目安を次に示します。

いずれの場合も、エクスポートツール 2 を実行するマシンに搭載するメモリは、「使用メモリ」を 4 倍した容量のメモリが必要です。また、マシンスペックによって所要時間は異なります。

性能採取対象 CU 数が 64 個以下で、サンプリング間隔が 1～15 分の場合（1440 プロット）

オープン時： LU パス数 メインフレーム時：LDEV 数	使用メモリ	ドライブ容量	各条件（出力範囲、出力フォーマット、出力ファイル圧縮）での所要時間		
			全プロット	全プロット	全プロット
			resourceid_ on_row※	resourceid_ on_row※	resourceid_ on_column※
			圧縮なし	ZIP 圧縮	ZIP 圧縮
1,000 以下	1GB	10GB	4.6 時間	5.2 時間	5.8 時間
1,001～5,000	1GB	15GB	4.6 時間	5.2 時間	5.8 時間
5,001～10,000	2GB	35GB	4.6 時間	5.2 時間	6.4 時間
10,001～20,000	2GB	100GB	4.6 時間	5.2 時間	7.8 時間

注※

export data コマンドの-option の指定値（出力フォーマット）を示します。

このマニュアルの参考情報

このマニュアルを読むに当たっての参考情報を示します。

- [B.1 このマニュアルでの表記](#)
- [B.2 このマニュアルで使用している略語](#)
- [B.3 KB（キロバイト）などの単位表記について](#)

B.1 このマニュアルでの表記

このマニュアルで使用している表記を次の表に示します。

表記	製品名
DP	Dynamic Provisioning
GAD	global-active device
SI	ShadowImage
VM	Volume Migration
UR	Universal Replicator
TI	Thin Image Advanced
FC	FlashCopy
VSP One B85	Hitachi Virtual Storage Platform One Block 85

B.2 このマニュアルで使用している略語

このマニュアルで使用している略語を次の表に示します。

略語	フルスペル
bps	Bit Per Second
CU	Control Unit
I/O	Input/Output
ID	IDentifier
IOPS	Input Output Per Second
IPv6	Internet Protocol version 6
iSCSI	Internet Small Computer System Interface
LDEV	Logical DEVice
LU	Logical Unit
OS	Operating System

B.3 KB（キロバイト）などの単位表記について

1KB（キロバイト）は1,024バイト、1MB（メガバイト）は1,024KB、1GB（ギガバイト）は1,024MB、1TB（テラバイト）は1,024GB、1PB（ペタバイト）は1,024TBです。

1block（ブロック）は512バイトです。

1Cyl（シリンダ）をKBに換算した値は、ボリュームのエミュレーションタイプによって異なります。オープンシステムの場合、1Cylは960KBです。メインフレームシステムの場合、1Cylは870KBです。3380-xx、6586-xxについて、CLIのLDEV容量の表示は、ユーザがデータを格納できるユーザ領域の容量を表示するため、1Cylを720KBとしています。xxは任意の数字または文字を示します。



用語解説

(英字)

AMC

(Array Management Controller)

HSNBX に搭載される ESM アプリケーションが動作するハードウェア。

ALUA

(Asymmetric Logical Unit Access)

SCSI の非対称論理ユニットアクセス機能です。

ストレージ同士、またはサーバとストレージシステムを複数の冗長パスで接続している構成の場合に、どのパスを優先して使用するかをストレージシステムに定義して、I/O を発行できます。優先して使用するパスに障害が発生した場合は、他のパスに切り替わります。

bps

(bits per second)

データ転送速度の標準規格です。

CBX

(Controller Box)

CBX は DKC、コントローラシャーシと同義語です。詳しくは、「コントローラシャーシ」を参照してください。CBX2 台を指す場合は CBX ペアと記載する場合があります。

CC

(Concurrent Copy)

IBM 社の Concurrent Copy 機能のことです。

CHAP

(Challenge Handshake Authentication Protocol)

認証方式のひとつ。ネットワーク上でやり取りされる認証情報はハッシュ関数により暗号化されるため、安全性が高いです。

CHB

(Channel Board)

詳しくは「チャネルボード」を参照してください。

Child

Thin Image Advanced の用語で、Parent のメタデータを共有する先のペアまたはボリュームを指します。

Family 内に vClone 属性のボリュームが存在しない場合、ルートボリュームと同じスナップショットツリーに属するペアまたはボリュームが該当します。

Family 内に vClone 属性のボリュームが存在する場合、vClone Parent 属性のボリュームと同じスナップショットツリーに属するペアまたはボリューム、同一 Family 内の vClone 属性のボリューム、同一 Family 内の vClone 属性のボリュームと同じスナップショットツリーに属するペアまたはボリュームが該当します。

CLPR

(Cache Logical Partition)

キャッシュメモリを論理的に分割すると作成されるパーティション（区画）です。

CM

(Cache Memory (キャッシュメモリ))

詳しくは「キャッシュ」を参照してください。

CNA

(Converged Network Adapter)

HBA と NIC を統合したネットワークアダプタ。

CRC

(Cyclic Redundancy Check)

巡回冗長検査。コンピュータデータに対し、偶発的変化を検出するために設計された誤り訂正符号。

CSV

(Comma-Separated Values)

データベースソフトや表計算ソフトのデータをファイルとして保存するフォーマットの 1 つで、主にアプリケーション間のファイルのやり取りに使われます。それぞれの値はコンマで区切られています。

CTG

(Consistency Group)

詳しくは「コンシステンシーグループ」を参照してください。

CU

(Control Unit (コントロールユニット))

主に磁気ディスク制御装置を指します。

CV

(Customized Volume)

任意のサイズに設定できる論理ボリュームです。

CYL

(Cylinder (シリンダ))

複数枚の磁気ディスクから構成される磁気ディスク装置で、磁気ディスクの回転軸から等距離にあるトラックが磁気ディスクの枚数分だけ垂直に並び、この集合を指します。

DKB

(Disk Board)

ドライブとキャッシュメモリ間のデータ転送を制御するモジュールです。

DKC

(Disk Controller)

DKC は CBX、コントローラシャーシと同義語です。また、システムを総称する論理的な呼称として DKC が使われる場合があります。詳しくは、「コントローラシャーシ」を参照してください。

DKU

(Disk Unit)

各種ドライブを搭載するためのシャーシ（筐体）です。

DP-VOL

詳しくは「仮想ボリューム」を参照してください。

EAV

(Extended Address Volume)

IBM 社のストレージシステムが提供している、従来の 3390 型ボリュームではサポートできない大容量のボリュームを定義するための機能です。最大で、1,182,006 シリンダ/ボリュームまで定義できます。

ECC

(Error Check and Correct)

ハードウェアで発生したデータの誤りを検出し、訂正することです。

ENC

ドライブボックスに搭載され、コントローラシャーシまたは他のドライブボックスとのインターフェース機能を有します。

ESE-VOL

(Extent Space - Efficient Volume)

IBM 製品と互換性のある仮想ボリュームで、User Directed Space Release 機能によるページ解放が可能なボリュームです。

ESM

(Embedded Storage Manager)

本ストレージシステムにおける管理系ソフトウェアです。

ESMOS

(Embedded Storage Manager Operating System)

ESM を動作させるための OS や OSS を含んだファームウェアです。

ExG

(External Group)

外部ボリュームを任意にグループ分けしたものです。詳しくは「外部ボリュームグループ」を参照してください。

External MF

詳しくは「マイグレーションボリューム」を参照してください。

External ポート

外部ストレージシステムを接続するために使用する、ストレージシステムのポートです。

Failover

故障しているものと機能的に同等のシステムコンポーネントへの自動的置換。
この **Failover** という用語は、ほとんどの場合、同じストレージデバイスおよびホストコンピュータに接続されているインテリジェントコントローラに適用されます。
コントローラのうちの 1 つが故障している場合、**Failover** が発生し、残っているコントローラがその I/O 負荷を引き継ぎます。

Family

Thin Image Advanced の用語で、メタデータを共有する **Parent**（メタデータ共有元となるボリューム）と **Child**（**Parent** のメタデータ共有するペアまたはボリューム）の群れを指します。

FC

(Fibre Channel)

ストレージシステム間のデータ転送速度を高速にするため、光ケーブルなどで接続できるようにするインターフェースの規格のことです。

FICON

(Fibre Connection)

メインフレームシステム用の光チャネルの一種です。**FICON** では、ファイバチャネルの標準に基づいて **ESCON**[®] の機能が拡張されており、全二重データによる高速データ転送がサポートされています。

FM

(Flash Memory (フラッシュメモリ))

詳しくは「フラッシュメモリ」を参照してください。

GID

(Group ID)

ホストグループを作成するときに付けられる 2 桁の 16 進数の識別番号です。

GUI

(Graphical User Interface)

コンピュータやソフトウェアの表示画面をウィンドウや枠で分け、情報や操作の対象をグラフィック要素を利用して構成するユーザインターフェース。マウスなどのポインティングデバイスで操作することを前提に設計されます。

HBA

(Host Bus Adapter)

詳しくは「ホストバスアダプタ」を参照してください。

Hyper PAV

IBM OS の機能で、PAV の発展機能です。あるベースデバイスに割り当てたエイリアスデバイスが、同一 CU 内のベースデバイスすべてのエイリアスデバイスとして共有化されます。本ストレージシステムで **Compatible Hyper PAV** 機能を使用することにより、IBM OS から本ストレージシステム上のデバイスに対してこの機能を使えるようになります。

I/O モード

global-active device ペアのプライマリボリュームとセカンダリボリュームが、それぞれに持つ I/O の動作です。

I/O レート

ドライブへの入出力アクセスが 1 秒間に何回行われたかを示す数値です。単位は IOPS (I/Os per second) です。

In-Band 方式

RAID Manager のコマンド実行方式の 1 つです。コマンドを実行すると、管理ツールの操作端末またはサーバから、ストレージシステムのコマンドデバイスにコマンドが転送されます。

Initiator

属性が RCU Target のポートと接続するポートを持つ属性です。

iSNS

(Internet Storage Naming Service)

iSCSI デバイスで使われる、自動検出、管理および構成ツールです。

iSNS によって、イニシエータおよびターゲット IP アドレスの特定リストで個々のストレージシステムを手動で構成する必要がなくなります。代わりに、iSNS は、環境内のすべての iSCSI デバイスを自動的に検出、管理および構成します。

LACP

(Link Aggregation Control Protocol)

複数回線を 1 つの論理的な回線として扱うための制御プロトコル。

LCU

(Logical Control Unit)

主に磁気ディスク制御装置を指します。

LDEV

(Logical Device (論理デバイス))

RAID 技術では冗長性を高めるため、複数のドライブに分散してデータを保存します。この複数のドライブにまたがったデータ保存領域を論理デバイスまたは LDEV と呼びます。ストレージ内の LDEV は、LDKC 番号、CU 番号、LDEV 番号の組み合わせで区別します。LDEV に任意の名前を付けることもできます。

このマニュアルでは、LDEV (論理デバイス) を論理ボリュームまたはボリュームと呼ぶことがあります。

LDEV 名

LDEV 作成時に、LDEV に付けるニックネームです。あとから LDEV 名の変更もできます。

LDKC

(Logical Disk Controller)

複数の CU を管理するグループです。各 CU は 256 個の LDEV を管理しています。

LUN/LU

(Logical Unit Number)

論理ユニット番号です。オープンシステム用のボリュームに割り当てられたアドレスです。オープンシステム用のボリューム自体を指すこともあります。

LUN セキュリティ

LUN に設定するセキュリティです。LUN セキュリティを有効にすると、あらかじめ決めておいたホストだけがボリュームにアクセスできるようになります。

LUN パス、LU パス

オープンシステム用ホストとオープンシステム用ボリュームの間を結ぶデータ入出力経路です。

LUSE ボリューム

オープンシステム用のボリュームが複数連結して構成されている、1つの大きな拡張ボリュームのことです。ボリュームを拡張することで、ポート当たりのボリューム数が制限されているホストからもアクセスできるようになります。

MCU

(Main Control Unit)

リモートコピーペアのプライマリボリューム（正 VOL）を制御するディスクコントロールユニットです。ユーザによって管理ツールの操作端末から要求されたリモートコピーコマンドを受信・処理し、RCU に送信します。

Mfibre

(Mainframe Fibre)

IBM のメインフレームのファイバチャネルを示す用語です。

MP ユニット

データ入出力を処理するプロセッサを含んだユニットです。データ入出力に関連するリソース（LDEV、外部ボリューム、ジャーナル）ごとに特定の MP ユニットの割り当てると、性能をチューニングできます。特定の MP ユニットの割り当ての方法と、ストレージシステムが自動的に選択した MP ユニットの割り当ての方法があります。MP ユニットに対して自動割り当ての設定を無効にすると、その MP ユニットがストレージシステムによって自動的にリソースに割り当てられることはないため、特定のリソース専用の MP ユニットとして使用できます。

MTIR

(Multi Target Incremental Resynchronization)

IBM 社の Multiple Target PPRC 機能で、2つの副サイト間で作成されるペアです。

MU

(Mirror Unit)

1つのプライマリボリュームと1つのセカンダリボリュームを関連づける情報です。

MVS

(Multiple Virtual Storage)

IBM 社のメインフレームシステム用 OS です。

Namespace

複数 LBA 範囲をまとめた、論理ボリュームの空間のことです。

Namespace Globally Unique Identifier

Namespace を識別するための、グローバルユニーク性を保証する 16Byte の識別情報です。SCSI LU での NAA Format6 で表現される、WWN に類似する情報です。

Namespace ID

NVM サブシステム上に作成された Namespace を、NVM サブシステムの中でユニークに識別するための識別番号です。

NGUID

(Namespace Globally Unique Identifier)

詳しくは、「Namespace Globally Unique Identifier」を参照してください。

NQN

(NVMe Qualified Name)

NVMe-oF 通信プロトコルで、NVMe ホストまたは NVM サブシステムを特定するためのグローバルユニークな識別子です。

NSID

(Namespace ID)

Namespace を特定するための、4Byte の識別情報です。

NVM

(Non-Volatile Memory)

不揮発性メモリです。

NVMe

(Non-Volatile Memory Express)

PCI Express を利用した SSD の接続インタフェース、通信プロトコルです。

NVMe over Fabrics

NVMe-oF 通信プロトコルによる通信を、様々な種類のネットワークファブリックに拡張する NVMe のプロトコルです。

NVMe/TCP

TCP/IP ネットワーク越しにホストとストレージ間で、NVMe-oF 通信プロトコルによる通信をするための NVMe over Fabrics 技術のひとつです。

NVMe コントローラ

NVMe ホストからのコマンド要求を処理する、物理的または論理的な制御デバイスです。

NVM サブシステム

NVM のデータストレージ機能を提供する制御システムです。

NVM サブシステムポート

ホストとコントローラが、NVMe I/O をするための Fabric に接続する通信ポートです。

Open/MF コンシステンシーグループ

Open/MF コンシステンシー維持機能を使用した、コンシステンシーグループのことです。
Open/MF コンシステンシーグループ内の TrueCopy ペアおよび TrueCopy for Mainframe ペアを、同時に分割したり再同期したりできます。

Out-of-Band 方式

RAID Manager のコマンド実行方式の 1 つです。コマンドを実行すると、クライアントまたはサーバから LAN 経由で ESM/AMC/RAID Manager サーバの中にある仮想コマンドデバイスにコマンドが転送されます。仮想コマンドデバイスからストレージシステムに指示を出し、ストレージシステムで処理が実行されます。

Parent

Thin Image Advanced の用語で、メタデータの共有元となるボリュームを指します。

Family 内に vClone 属性のボリュームが存在しない場合、ルートボリュームが該当します。
Family 内に vClone 属性のボリュームが存在する場合、vClone Parent 属性のボリュームが該当します。

PAV

IBM OS の機能で、一つのデバイスに対して複数の I/O 操作を並行して発行できるようにする機能です。本ストレージシステムで Compatible PAV 機能を使用することにより、IBM OS から本ストレージシステム上のデバイスに対してこの機能を使えるようになります。

PCB

(Printed Circuit Board)

プリント基盤です。このマニュアルでは、コントローラボードやチャネルボード、ディスクボードなどのボードを指しています。

Point to Point

2 点を接続して通信するトポロジです。

PPRC

(Peer-to-Peer Remote Copy)

IBM 社のリモートコピー機能です。

Quorum ディスク

パスやストレージシステムに障害が発生したときに、global-active device ペアのどちらのボリュームでサーバからの I/O を継続するのかを決めるために使われます。外部ストレージシステムに設置します。

RAID

(Redundant Array of Independent Disks)

独立したディスクを冗長的に配列して管理する技術です。

RAID Manager

コマンドインタフェースでストレージシステムを操作するためのプログラムです。

RCU

(Remote Control Unit)

リモートコピーペアのセカンダリボリューム (副 VOL) を制御するディスクコントロールユニットです。リモートパスによって MCU に接続され、MCU からコマンドを受信して処理します。

RCU Target

属性が Initiator のポートと接続するポートが持つ属性です。

RCU Target ポート

Initiator ポートと接続します。RCU Target ポートは、ホストのポートとも通信できます。

RDEV

(Real Device)

IBM 用語です。DASD の実装置アドレスを意味します。

Read Hit 率

ストレージシステムの性能を測る指標の 1 つです。ホストがディスクから読み出そうとしていたデータが、どのくらいの頻度でキャッシュメモリに存在していたかを示します。単位はパーセントです。Read Hit 率が高くなるほど、ディスクとキャッシュメモリ間のデータ転送の回数が少なくなるため、処理速度は高くなります。

S/N

(Serial Number)

ストレージシステムに一意に付けられたシリアル番号（装置製番）です。

SAN

(Storage-Area Network)

ストレージシステムとサーバ間を直接接続する専用の高速ネットワークです。

SIM

(Service Information Message)

ストレージシステムのコントローラがエラーやサービス要求を検出したときに生成されるメッセージです。原因となるエラーを解決し、VSP One Block Administrator 画面上で SIM が解決したことを報告することを、「SIM をコンプリートする」と言います。

SM

(Shared Memory)

詳しくは「シェアドメモリ」を参照してください。

SMS

(Storage Management Subsystem)

IBM 社のメインフレームの OS が提供するツールで、データセットを容易かつ効率的に割り当てることができます。

SNMP

(Simple Network Management Protocol)

ネットワーク管理するために開発されたプロトコルの 1 つです。

SSID

ストレージシステムの ID です。ストレージシステムでは、搭載される LDEV のアドレスごと (64、128、256) に 1 つの SSID が設定されます。

SSL

(Secure Sockets Layer)

インターネット上でデータを安全に転送するためのプロトコルであり、Netscape Communications 社によって最初に開発されました。SSL が有効になっている 2 つのピア（装置）は、秘密鍵と公開鍵を利用して安全な通信セッションを確立します。どちらのピア（装置）も、ランダムに生成された対称キーを利用して、転送されたデータを暗号化します。

Super PAV

IBM OS の機能で、Hyper PAV の拡張機能です。あるベースデバイスに割り当てたエイリアスデバイスが、複数 CU 内のすべてのベースデバイスのエイリアスデバイスとして共有化されます。本ストレージシステムで Super PAV 機能を有効にすれば、IBM OS から本ストレージシステム上のデバイスに対してこの機能を使えるようになります。

T10 PI

(T10 Protection Information)

SCSI で定義された保証コード基準の一つです。T10 PI では、512 バイトごとに 8 バイトの保護情報 (PI) を追加して、データの検証に使用します。T10 PI にアプリケーションおよび OS を含めたデータ保護を実現する DIX (Data Integrity Extension) を組み合わせることで、アプリケーションからディスクドライブまでのデータ保護を実現します。

Target

ホストと接続するポートが持つ属性です。

TSE-VOL

(Track Space - Efficient Volume)

DP-VOL 同様の仮想ボリュームですが、IBM 製品の FlashCopy、および Compatible Software for IBM® FlashCopy® SE のターゲットボリュームとしてのみ使用できます。IBM ホストから認識できるよう互換を保持しています。DP-VOL とプールを共用するため、TSE-VOL を使用するためには、Compatible Software for IBM® FlashCopy® SE だけではなく、Dynamic Provisioning for Mainframe のライセンスもインストールする必要があります。

UPS

(Uninterruptible Power System)

ストレージシステムが停電や、瞬停のときでも停止しないようにするために搭載してある予備の電源のことです。

URL

(Uniform Resource Locator)

リソースの場所や種類の両方を記載しているインターネット上の住所を記述する標準方式です。

UUID

(User Definable LUN ID)

ホストから論理ボリュームを識別するために、ストレージシステム側で設定する任意の ID です。

Vary Offline

メインフレームシステム用ホストとオンライン接続しているデバイスを、オフライン状態に切り替える操作です。Vary Offline の操作をするには、メインフレームシステム用ホストからコマンドを実行します。

Vary Online

デバイスをメインフレームシステム用ホストとオンライン接続するための操作です。Vary Online の操作をするには、メインフレームシステム用ホストからコマンドを実行します。

vClone Parent 属性のボリューム

Thin Image Advanced の用語で、Family 内に vClone 属性のボリュームが存在する場合、そのメタデータの共有元になるボリュームを指します。

vClone 属性のボリューム

Thin Image Advanced の用語で、仮想クローン作成によって取得したスナップショットデータを格納するボリュームを指します。

VDEV

(Virtual Device)

IBM 用語です。DASD の仮想アドレスを意味します。

または、Hitachi 用語でパリティグループ内にある論理ボリュームのグループを意味します。

VDEV は任意のサイズの論理ボリューム (CV) とフリースペースから構成されます。VDEV 内に任意のサイズの論理ボリューム (CV) とフリースペースを作成することもできます。

VLAN

(Virtual LAN)

スイッチの内部で複数のネットワークに分割する機能です (IEEE802.1Q 規定)。

VOLSER

(Volume Serial Number)

個々のボリュームを識別するために割り当てられる番号です。VSN と呼びます。LDEV 番号や LUN とは無関係です。

VSN

(Volume Serial Number)

個々のボリュームを識別するために割り当てられる番号です。VOLSER と呼びます。

VSP One Block Administrator

ストレージシステムの構成やリソースを操作するシンプルな GUI の管理ツールです。

VTOC

(Volume Table of Contents)

ディスク上の複数データセットのアドレスや空き領域を管理するための情報を格納するディスク領域です。

Write Hit 率

ストレージシステムの性能を測る指標の 1 つです。ホストがディスクへ書き込もうとしていたデータが、どのくらいの頻度でキャッシュメモリに存在していたかを示します。単位はパーセントです。Write Hit 率が高くなるほど、ディスクとキャッシュメモリ間のデータ転送の回数が少なくなるため、処理速度は高くなります。

WWN

(World Wide Name)

ホストバスアダプタの ID です。ストレージ装置を識別するためのもので、実体は 16 桁の 16 進数です。

zHyperWrite 機能

IBM 社の DS シリーズ ディスクアレイ装置でサポートしている zHyperWrite の互換機能です。上位アプリケーションである DB2 のログを書き込むときに行われる二重化処理で、TrueCopy for Mainframe の更新コピーを使用して二重化処理を行うのではなく、ホストから TrueCopy for Mainframe のプライマリボリュームおよびセカンダリボリュームに対して書き込みを行います。zHyperWrite の詳細については、IBM のマニュアルを参照してください。

(ア行)

アクセス属性

ボリュームが読み書き可能になっているか (Read/Write)、読み取り専用になっているか (Read Only)、それとも読み書き禁止になっているか (Protect) どうかを示す属性です。

アクセスパス

ストレージシステム内の、データとコマンドの転送経路です。

インクリメンタルリシンク

IBM 社の Multiple Target PPRC 機能で、MTIR ペア間で実行される差分コピーです。

インスタンス

特定の処理を実行するための機能集合のことです。

インスタンス番号

インスタンスを区別するための番号です。1 台のサーバ上で複数のインスタンスを動作させる
とき、インスタンス番号によって区別します。

エクステント

IBM 社のストレージシステム内で定義された論理デバイスは、ある一定のサイズに分割されて
管理されます。この、分割された最小管理単位の名称です。

エミュレーション

あるハードウェアまたはソフトウェアのシステムが、ほかのハードウェアまたはソフトウェア
のシステムと同じ動作をすること（または同等に見えるようにすること）です。一般的には、
過去に蓄積されたソフトウェアの資産を役立てるためにエミュレーションの技術が使われま
す。

(力行)

外部ストレージシステム

本ストレージシステムに接続されているストレージシステムです。

外部パス

本ストレージシステムと外部ストレージシステムを接続するパスです。外部パスは、外部ボリ
ュームを内部ボリュームとしてマッピングしたときに設定します。複数の外部パスを設定する
ことで、障害やオンラインの保守作業にも対応できます。

外部ボリューム

外部ボリュームグループに作成した LDEV のことです。マッピングした外部ストレージシ
ステムのボリュームを実際にホストや他プログラムプロダクトから使用するためには、外部ボリ
ュームグループに LDEV を作成する必要があります。

外部ボリュームグループ

外部ストレージシステムのボリュームをマッピングしている、本ストレージシステム内の仮想
的なボリュームです。
外部ボリュームグループはパリティ情報を含みませんが、管理上はパリティグループと同じよ
うに取り扱います。

鍵管理サーバ

暗号化鍵を管理するサーバです。暗号化鍵を管理するための規格である KMIP (Key
Management Interoperability Protocol) に準じた鍵管理サーバに暗号化鍵をバックアップで
き、また、鍵管理サーバにバックアップした暗号化鍵から暗号化鍵をリストアできます。

書き込み待ち率

ストレージシステムの性能を測る指標の 1 つです。キャッシュメモリに占める書き込み待ち
データの割合を示します。

仮想ボリューム

実体を持たない、仮想的なボリュームです。Dynamic Provisioning、または Dynamic Provisioning for Mainframe で使用する仮想ボリュームを DP-VOL と呼びます。

監査ログ

ストレージシステムに対して行われた操作や、受け取ったコマンドの記録です。Syslog サーバへの転送設定をすると、監査ログは常時 Syslog サーバへ転送され、Syslog サーバから監査ログを取得・参照できます。

管理ツールの操作端末

ストレージシステムを操作するためのコンピュータです。

キャッシュ

チャンネルとドライブの間にあるメモリです。中間バッファとしての役割があります。キャッシュメモリとも呼ばれます。

共用メモリ

詳しくは「シェアドメモリ」を参照してください。

形成コピー

ホスト I/O プロセスとは別に、プライマリボリュームとセカンダリボリュームを同期させるプロセスです。

更新コピー

形成コピー（または初期コピー）が完了したあとで、プライマリボリュームの更新内容をセカンダリボリュームにコピーして、プライマリボリュームとセカンダリボリュームの同期を保持するコピー処理です。

構成定義ファイル

RAID Manager を動作させるためのシステム構成を定義するファイルを指します。

コピー系プログラムプロダクト

ストレージシステムに備わっているプログラムのうち、データをコピーするものを指します。ストレージシステム内のボリューム間でコピーするローカルコピーと、異なるストレージシステム間でコピーするリモートコピーがあります。

コピーグループ

プライマリボリューム（正側ボリューム）、およびセカンダリボリューム（副側ボリューム）から構成されるコピーペアを 1 つにグループ化したものです。または、正側と副側のデバイスグループを 1 つにグループ化したものです。RAID Manager でレプリケーションコマンドを実行する場合、コピーグループを定義する必要があります。

コマンドデバイス

ホストから RAID Manager コマンドを実行するために、ストレージシステムに設定する論理デバイスです。コマンドデバイスは、ホストから RAID Manager コマンドを受け取り、実行対象の論理デバイスに転送します。

Out-of-band 方式で接続された RAID Manager、もしくは内蔵 CLI を用いて設定してください。

コマンドデバイスセキュリティ

コマンドデバイスに適用されるセキュリティです。

コレクションコピー

ストレージシステム内のディスク障害を回復するためのコピー動作のことです。予備ディスクへのコピー、または交換ディスクへのコピー等が含まれます。

コンシステンシーグループ

コピー系プログラムプロダクトで作成したペアの集まりです。コンシステンシーグループ ID を指定すれば、コンシステンシーグループに属するすべてのペアに対して、データの整合性を保ちながら、特定の操作を同時に実行できます。

コントローラシャーシ

ストレージシステムを制御するコントローラが備わっているシャーシ（筐体）です。コントローラシャーシは DKC、CBX と同義語です。

(サ行)

サーバ証明書

サーバと鍵ペアを結び付けるものです。サーバ証明書によって、サーバは自分がサーバであることをクライアントに証明します。これによってサーバとクライアントは SSL を利用して通信できるようになります。サーバ証明書には、自己署名付きの証明書と署名付きの信頼できる証明書の 2 つの種類があります。

サイドファイル

コンカレントコピーで使用している内部のテーブルです。
コピー未完了部分に更新 I/O が発生した際、バックアップデータ（スナップショット）をサイドファイルに退避することで、コピー先のデータ整合性を正しく保つために使用されます。

サイドファイルキャッシュ

コンカレントコピー実施中に生成されるバックアップデータ（スナップショット）を格納する領域で、キャッシュ内に一時的に確保されます。

サブシステム NQN

NVM サブシステムに定義された NQN です。
NQN の詳細については、「NQN」を参照してください。

差分テーブル

コピー系プログラムプロダクトおよび Volume Migration で共有するリソースです。Volume Migration 以外のプログラムプロダクトでは、ペアのプライマリボリュームとセカンダリボリュームのデータに差分があるかどうかを管理するために使用します。Volume Migration では、ボリュームの移動中に、ソースボリュームとターゲットボリュームの差分を管理するために使用します。

差分データ

ペアボリュームがサスペンドしたときの状態からの正ボリュームへの更新データのことです。

シェアドメモリ

キャッシュ上に論理的に存在するメモリです。共用メモリとも呼びます。ストレージシステムの共通情報や、キャッシュの管理情報（ディレクトリ）などを記憶します。これらの情報を基に、ストレージシステムは排他制御を行います。また、差分テーブルの情報もシェアドメモリで管理されており、コピーペアを作成する場合にシェアドメモリを利用します。

自己署名付きの証明書

自分自身で自分用の証明書を生成します。この場合、証明の対象は証明書の発行者と同じになります。ファイアウォールに守られた内部 LAN 上でクライアントとサーバ間の通信が行われている場合は、この証明書でも十分なセキュリティを確保できるかもしれません。

システムディスク

ストレージシステムが使用するボリュームのことです。一部の機能を使うためには、システムディスクの作成が必要です。

システムプールボリューム、システムプール VOL

プールを構成するプールボリュームのうち、1 つのプールボリュームがシステムプールボリュームとして定義されます。システムプールボリュームは、プールを作成したとき、またはシステムプールボリュームを削除したときに、優先順位に従って自動的に設定されます。なお、システムプールボリュームで使用可能な容量は、管理領域の容量を差し引いた容量になります。管理領域とは、プールを使用するプログラムプロダクトの制御情報を格納する領域です。

ジャーナルボリューム

Universal Replicator と Universal Replicator for Mainframe の用語で、プライマリボリュームからセカンダリボリュームにコピーするデータを一時的に格納しておくためのボリュームのことです。ジャーナルボリュームには、プライマリボリュームと関連づけられているマスタジャーナルボリューム、およびセカンダリボリュームと関連づけられているリストアジャーナルボリュームとがあります。

詳細 API

リクエストラインに simple を含まない REST API です。ストレージシステムの情報取得や構成変更することができます。

状態遷移

ペアボリュームのペア状態が変化することです。

冗長パス

チャンネルボードの故障などによって LUN パスが利用できなくなったときに、その LUN パスに代わってホスト I/O を引き継ぐ LUN パスです。交替パスとも言います。

初期コピー

新規にコピーペアを作成すると、初期コピーが開始されます。初期コピーでは、プライマリボリュームのデータがすべて相手のセカンダリボリュームにコピーされます。初期コピー中も、ホストサーバからプライマリボリュームに対する Read/Write などの I/O 操作は続行できます。

署名付きの信頼できる証明書

証明書発行要求を生成したあとで、信頼できる CA 局に送付して署名してもらいます。CA 局の例としては VeriSign 社があります。

シリアル番号

ストレージシステムに一意に付けられたシリアル番号（装置製番）です。

シンプル API

リクエストラインに simple を含む REST API です。
ストレージシステムの情報取得や構成変更することができます。

スナップショットグループ

Thin Image Advanced で作成した複数のペアの集まりです。複数のペアに対して同じ操作を実行できます。

スナップショットデータ

Thin Image Advanced では、特定時点のデータの複製のことを指します。

スワップ

プライマリボリューム/セカンダリボリュームを逆転する操作のことです。

正 VOL、正ボリューム

詳しくは「プライマリボリューム」を参照してください。

正サイト

通常時に、業務（アプリケーション）を実行するサイトを指します。

セカンダリボリューム

ペアとして設定された 2 つのボリュームのうち、コピー先のボリュームを指します。なお、プライマリボリュームとペアを組んでいるボリュームをセカンダリボリュームと呼びますが、Thin Image Advanced では、セカンダリボリューム（仮想ボリューム）ではなく、プールにデータが格納されます。

絶対 LUN

SCSI/iSCSI/Fibre ポート上に設定されているホストグループとは関係なく、ポート上に絶対的に割り当てられた LUN を示します。

センス情報

エラーの検出によってペアがサスペンドされた場合に、正サイトまたは副サイトのストレージシステムが、適切なホストに送信する情報です。ユニットチェックの状況が含まれ、災害復旧に使用されます。

専用 DASD

IBM 用語です。z/VM 上の任意のゲスト OS のみ利用可能な DASD を意味します。

ソースボリューム

Compatible FlashCopy®、および Volume Migration の用語で、Compatible FlashCopy®の場合はボリュームのコピー元となるボリュームを、Volume Migration の場合は別のパリティグループへと移動するボリュームを指します。

ゾーニング

ホストとリソース間トラフィックを論理的に分離します。ゾーンに分けることにより、処理は均等に分散されます。

(タ行)

ターゲットボリューム

Compatible FlashCopy®、および Volume Migration の用語で、Compatible FlashCopy®の場合はボリュームのコピー先となるボリュームを、Volume Migration の場合はボリュームの移動先となる領域を指します。

チャンネルエクステンダ

遠隔地にあるメインフレームホストをストレージシステムと接続するために使われるハードウェアです。

チャンネルボード

ストレージシステムに内蔵されているアダプタの一種で、ホストコマンドを処理してデータ転送を制御します。

重複排除用システムデータボリューム（データストア）

容量削減の設定が重複排除および圧縮の仮想ボリュームが関連づけられているプール内で、重複データを格納するためのボリュームです。

重複排除用システムデータボリューム（フィンガープリント）

容量削減の設定が重複排除および圧縮の仮想ボリュームが関連づけられているプール内で、重複排除データの制御情報を格納するためのボリュームです。

ディスクボード

ストレージシステムに内蔵されているアダプタの一種で、キャッシュとドライブの間のデータ転送を制御します。

データ削減共有ボリューム

データ削減共有ボリュームは、Adaptive Data Reduction の容量削減機能を使用して作成する仮想ボリュームです。Thin Image Advanced ペアのボリュームとして使用できます。データ削減共有ボリュームは、Redirect-on-Write のスナップショット機能を管理するための制御データ（メタデータ）を持つボリュームです。

データ削減共有ボリュームには、容量削減設定が有効なデータ削減共有ボリュームと、容量削減設定が無効なデータ削減共有ボリュームという 2 種類があります。詳しくは、「容量削減設定が有効なデータ削減共有ボリューム」または「容量削減設定が無効なデータ削減共有ボリューム」を参照してください。

転送レート

ストレージシステムの性能を測る指標の 1 つです。1 秒間にディスクへ転送されたデータの大きさを示します。

同期コピー

ホストからプライマリボリュームに書き込みがあった場合に、リアルタイムにセカンダリボリュームにデータを反映する方式のコピーです。ボリューム単位のリアルタイムデータバックアップができます。優先度の高いデータのバックアップ、複写、および移動業務に適しています。

トポロジ

デバイスの接続形態です。Fabric、FC-AL、および Point-to-point の 3 種類があります。

ドライブボックス

各種ドライブを搭載するためのシャーシ（筐体）です。

（ナ行）

内部ボリューム

本ストレージシステムが管理するボリュームを指します。

(ハ行)

パリティグループ

同じ容量を持ち、1つのデータグループとして扱われる一連のドライブを指します。パリティグループには、ユーザデータとパリティ情報の両方が格納されているため、そのグループ内の1つまたは複数のドライブが利用できない場合にも、ユーザデータにはアクセスできます。場合によっては、パリティグループを RAID グループ、ECC グループ、またはディスクアレイグループと呼ぶことがあります。

非対称アクセス

global-active device でのクロスパス構成など、サーバとストレージシステムを複数の冗長パスで接続している場合で、ALUA が有効のときに、優先して I/O を受け付けるパスを定義する方法です。

非同期コピー

ホストから書き込み要求があった場合に、プライマリボリュームへの書き込み処理とは非同期に、セカンダリボリュームにデータを反映する方式のコピーです。複数のボリュームや複数のストレージシステムにわたる大量のデータに対して、災害リカバリを可能にします。

ピントラック

(pinned track)

物理ドライブ障害などによって読み込みや書き込みができないトラックです。固定トラックとも呼びます。

ファイバチャネル

光ケーブルまたは銅線ケーブルによるシリアル伝送です。ファイバチャネルで接続された RAID のディスクは、ホストからは SCSI のディスクとして認識されます。

プール

プールボリューム（プール VOL）を登録する領域です。Dynamic Provisioning、Dynamic Provisioning for Mainframe、および Thin Image Advanced がプールを使用します。

プールボリューム、プール VOL

プールに登録されているボリュームです。Dynamic Provisioning および Dynamic Provisioning for Mainframe ではプールボリュームに通常のデータを格納し、Thin Image Advanced ではスナップショットデータをプールボリュームに格納します。

副 VOL、副ボリューム

詳しくは「セカンダリボリューム」を参照してください。

副サイト

主に障害時に、業務（アプリケーション）を正サイトから切り替えて実行するサイトを指します。

プライマリボリューム

ペアとして設定された2つのボリュームのうち、コピー元のボリュームを指します。

フラッシュメモリ

各プロセッサに搭載され、ソフトウェアを格納している不揮発性のメモリです。

ブロック

ボリューム容量の単位の一つです。1 ブロックは 512 バイトです。

ペア

データ管理目的として互いに関連している 2 つのボリュームを指します（例、レプリケーション、マイグレーション）。ペアは通常、お客様の定義によりプライマリもしくはソースボリューム、およびセカンダリもしくはターゲットボリュームで構成されます。

ペア状態

ペアオペレーション前後にボリュームペアに割り当てられた内部状態。ペアオペレーションが実行されている、もしくは結果として障害となっているときにペア状態は変化します。ペア状態はコピーオペレーションを監視したり、システム障害を検出するために使われます。

ペアテーブル

ペアを管理するための制御情報を格納するテーブルです。

ページ

DP の領域を管理する単位です。Dynamic Provisioning の場合、1 ページは 42MB、Dynamic Provisioning for Mainframe の場合、1 ページは 38MB です。

ポートモード

ストレージシステムのチャネルボードのポート上で動作する、通信プロトコルを選択するモードです。ポートの動作モードとも言います。

ホスト-Namespace パス

日立ストレージシステムで、Namespace セキュリティを使用する際に、ホスト NQN ごとに各 Namespace へのアクセス可否を決定するための設定です。Namespace パスとも呼びます。

ホスト NQN

NVMe ホストに定義された NQN です。
NQN の詳細については、「NQN」を参照してください。

ホストグループ

ストレージシステムの同じポートに接続し、同じプラットフォーム上で稼働しているホストの集まりのことです。あるホストからストレージシステムに接続するには、ホストをホストグループに登録し、ホストグループを LDEV に結び付けます。この結び付ける操作のことを、LUN パスを追加するとも呼びます。

ホストグループ 0 (ゼロ)

「00」という番号が付いているホストグループを指します。

ホストデバイス

ホストに提供されるボリュームです。HDEV (Host Device) とも呼びます。

ホストバスアダプタ

(Host Bus Adapter)

オープンシステム用ホストに内蔵されているアダプタで、ホストとストレージシステムを接続するポートの役割を果たします。それぞれのホストバスアダプタには、16 桁の 16 進数による ID が付いています。ホストバスアダプタに付いている ID を WWN (Worldwide Name) と呼びます。

ホストモード

オープンシステム用ホストのプラットフォーム（通常は OS）を示すモードです。

(マ行)

マイグレーションボリューム

異なる機種のストレージシステムからデータを移行させる場合に使用するボリュームです。

マッピング

本ストレージシステムから外部ボリュームを操作するために必要な管理番号を、外部ボリュームに割り当てることです。

ミニディスク DASD

IBM 用語です。z/VM 上で定義される仮想 DASD を意味します。

(ヤ行)

容量削減設定が無効なデータ削減共有ボリューム

Adaptive Data Reduction の容量削減機能が有効、かつ、容量削減設定（「圧縮」または「重複排除および圧縮」）が無効である仮想ボリュームを指します。

容量削減設定が有効なデータ削減共有ボリューム

Adaptive Data Reduction の容量削減機能が有効、かつ、容量削減設定（「圧縮」または「重複排除および圧縮」）が有効である仮想ボリュームを指します。

(ラ行)

リソースグループ

ストレージシステムのリソースを割り当てたグループを指します。リソースグループに割り当てられるリソースは、LDEV 番号、パリティグループ、外部ボリューム、ポートおよびホストグループ番号です。

リモートコマンドデバイス

外部ストレージシステムのコマンドデバイスを、本ストレージシステムの内部ボリュームとしてマッピングしたものです。リモートコマンドデバイスに対して RAID Manager コマンドを発行すると、外部ストレージシステムのコマンドデバイスに RAID Manager コマンドを発行でき、外部ストレージシステムのペアなどを操作できます。

リモートストレージシステム

ローカルストレージシステムと接続しているストレージシステムを指します。

リモートパス

リモートコピー実行時に、遠隔地にあるストレージシステム同士を接続するパスです。

リンクアグリゲーション

複数のポートを集約して、仮想的にひとつのポートとして使う技術です。
これによりデータリンクの帯域幅を広げるとともに、ポートの耐障害性を確保します。

レコードセット

非同期コピーの更新コピーモードでは、正 VOL の更新情報と制御情報をキャッシュに保存します。これらの情報をレコードセットといいます。ホストの I/O 処理とは別に、RCU に送信されます。

レスポンスタイム

モニタリング期間内での平均の応答時間。あるいは、エクスポートツール 2 で指定した期間内でのサンプリング期間ごとの平均の応答時間。単位は、各モニタリング項目によって異なります。

ローカルストレージシステム

管理ツールの操作端末を接続しているストレージシステムを指します。

© 日立ヴァンタラ株式会社

〒 244-0817 神奈川県横浜市戸塚区吉田町 292 番地
